

星女郎

泉鏡花

青空文庫

俱利伽羅峠には、新道と故道とある。いわゆる一騎落から礪波山へ続く古戦場は、その故道で。これは大分以前から特別好物な旅客か、山伏、行者の類のほか、余り通らなかつた。——とところで、今度境三造の過つたのは、新道……天田越と言う。絶頂だけ徒歩すれば、俵で越された、それも一昔。汽車が通じてからざつと十年になるから、この天田越が、今は既に随分、好事。

さて目的は別になかつた。

暑中休暇に、どこかその辺を歩行いて見よう。以前幾たびか上下したが、その後は多年麓も見舞わぬ、俱利伽羅峠を、というに過ぎぬ。

けれども徒勞でないのは、境の家は、今こそ東京にあるが、もと富山県に、父が、某の職を奉じた頃、金沢の高等学校に寄宿していた。従つて暑さ寒さのよりよりごとに、度々俱利伽羅を越えたので、この時志したのは、謂わば第二の故郷に帰省する意味にもなる。汽車は津幡で下りた。市との間に、もう一つ、森下と云う町があつて、そこへも停

車場シヨウが出来るそうなの、が、まだその運びに到らぬから、津幡は金沢から富山の方へ最初の駅。

聞四里、聞えた加賀の松並木の、西東あつちこち、津幡まではほとんど家続きで、蓮れんこ根ねが名産の、蓮田はすだが稲田より風薫る。で、さまで旅らしい趣はないが、この駅を越すと竹の橋——源平盛衰記に——源氏の一手ひとては樋口兼光大将ひぐちかねみつにて、笠野富田を打廻り、竹の橋からめての搦手にこそ向いけれ——とある、ちようど峠の真下の里で。俱利伽羅を仰ぐと早や、名だたる古戦場の面影が眉に迫つて、驚破すわ、松風も鯨波ときの声、山の緑も草摺くさすりを揺り揃えたる数万すまんの軍兵ぐんびよう。伏屋ふせやが門かどの卯うの花も、幽霊よろいの鏡よういらしく、背戸の井戸の山吹も、美たおや女の名の可懐なつかしい。

これは旧もととても異かわりはなかつた。しかしその頃は、走らす車、運ぶ草鞋わらじ、いぎ峠にかかると一息つくため、ここに麓路ふもとじを挟さしはさき、竹の橋の出外ではずれに、四五軒の茶店があつて、どこも異らぬ茶染ちやぞめ、藍染あいぞめ、講中手拭こうじゆうてぬぐいの軒のきにひらひらとある蔭かげから、東海道の宿々のように、きちんと呼吸いきは合あわぬながら、田舎は田舎だけに声こわづ繕つくろいして、

「お掛けやす。」

「お休みや—す。」

それ、馬のすずに調子を合わせる。中には若い媚めかしい声があつて、化粧した婦も居た。

境も、往き還り奥の見晴しに通つて、縁から峠に手を翳す、馴染の茶店があつたのであるが、この度見ると、可なり広いその家構の跡は、草茫茫々、山を見通しの、ずつと裏の小高い丘には、松が一本、野を守る姿に立つて、小さな墓の累つたのが望まれる。

由緒ある塚か、知らず、そこを旅人の目から包んでいた一叢の樹立も、大方切払われたのであろう、どこか、あからさまに里が浅くなつて、われ一人、草ばかり茂つた上に、影の濃いのも物寂しい。

それに、藁屋や垣根の多くが取払われたせいか、峠の裾が、ずらりと引いて、風にひだ打つ道の高低、畝々と畝つた処が、心覚えより早や目前に近い。

が、そこまでは並木の下を、例に因つて、驟の松が高く、蔭が出来て涼いから、洋傘を畳んで支いて、立場の方を振返ると、農家は、さすがに有りのままで、遠い青田に、俯向いた菅笠もちらほらあるが、藁草の色とともに、笠も日向に乾びている。

境は急に心細いようになつた。前にも後にも、往來の人はなかつたのである。

偶と思出したことがあつて、三造は並木の梢——松の裏を高く仰いで見た。鶺鴒の尾の、

しだり尾の靡きはせずや。……

二

往年、雨上りの朝、ちようどこの辺を通掛つた時、松の霰に濡色見せた、紺青の尾を豊に、樹の間の蒼空を潜り潜り、鶺鴒が急ぎもせず、翼で真白な雲を泳いで、すいと伸し、すいと伸して、並木の梢を道づれになつた。可懐いその姿を見るのも、またこの旅の一興に算えたのであつたから——それを思出して窺つたが……今日は見えぬ。なお前途の空を視め視め、かかる日の高い松の上に、蟬の声の喧しい中にも、峙してその鶺鴒が居はせぬかと、仰いで幹をたたきなどして、右瞻左瞻ながら、うかうかと並木を辿る——大な蜻蛉の、跟をつけて行くのも知らずに。

やがて樹立が疎らになつて、右左両方へ梢が展くと、山の根が迫つて来た。俱利伽羅のその風情は、偉大なる雲の峯が裾を拵げたようである。

処へ、横雲の漾う状で、一叢の森の、低く目前に顕われたのは、三四軒の埴生の小屋で。路傍に沿うて、枝の間に梟の巢のごとく並んだが、どこに礎を据えたとしもなく、

元村から溢れて出たか、崖から墜ちて来たか、未来も、過去も、世はただ飯の宿と断念めたらしい百姓家——その昔、大名の行列は拝んだかわりに、汽車の煙には吃驚しそうな人々が住んでいよう。

朝夕の糧を兼ねた生垣の、人丈に近い茗荷の葉に、野茨が白くちらちら交つて、犬が前脚で届きそうな屋根の下には、羽目へ掛けて小枝も払わぬ青葉枯葉、松薪をひしと積んだは、今から冬の用意をした、雪の山家と領かれて、見るからに佻しい戸の、その蜘蛛の巢は、山姥の髪のみだれなり。

一軒二軒……三軒目の、同じような茗荷の垣の前を通ると、小家は引込んで、前が背戸の、早や爪尖あがりになる山路との劃目に、桃の樹が一株あり、葉蔭に真黒なもの、牛の背中。

この畜生、仔細は無いが、思いがけない、物珍らしさ。そのずんど切な、たらたらと濡れた鼻頭に、まざまざと目を留めると、あの、前世を語りそうな、意味ありげな目で、熟と見据えて、むぐむぐと口を動かさずに、ペろりと横なめをした舌が円い。

その舌の尖を摺って、野茨の花がこぼれたように、真白な蝶が翩然と飛んだ。が、角にも留まらず、直ぐに消えると、ぱつと地の底へ潜った状に、大牛がフイと失せた。……

失せた……と思う暇もなしに、忽然として消えたのである。

「やー!」

声を出して、三造はきよとんとして、何かに取掴まったらしく、堅くなつてそこらを捻向く……と、峠とも山とも知れず、ただ樹の上に樹が累なり、中空を蔽うて四方から押被さつて聳え立つ——その向つて行くべき、きざきざの緑の端に、のこのこと天窓を出した雲の峯の尖端が、あたかも空へ飛んで、幻にぼちぼち残つた。牛頭に肖たとは愚か。三造は悚然とした。

が、遁げ戻るでもなし、進むでもなく、無意識に一足出ると、何、何、何の事もなし、牛は依然としてのつそりと居る。

一体、樹の間から湧いて出たような例の姿を、通りがかりに一見し、瞻り瞻り、つい一足歩行いた、……その機会に、件の桃の木に隠れたので、今でも真正面へちよつと戻れば、立処にまた消え失せよう。

蝶も牛の背を越したかな……左の胴腹に、ひらひらひら。

「はは、はは。」

独りで笑出した。

「まず昼間で可^よかつた。夜中にこれを見せられると、申分なく目をまわす。」

三

これより前^{さき}、境はふと、ものの頭^{かしら}を葉越^{はごし}に見た時、形から、名から、牛の首……と胸に浮ぶと、この栗殻^{くりから}とは方角の反対な、加賀と越前^{えちぜん}の国^{くに}境^{さかい}に、同じ名の牛首がある——その山も二三度越えたが、土地に古代の佛^{おほかげ}あり。麓^{ふもと}の里に、鍛頭^{しころずき}巾を取つて被^かず、薙^なぎなた刀小脇^{かひこ}に搔^か込んだ、面^{つら}には丹^にを塗り、眼^{まなこ}は黄金^{こがね}、髯^{ひげ}しろがね、銀^{ぎん}の、六尺有余の大彫像、熊^{くま}坂^{まさか}長^{ちやう}範^{はん}を安置して、観音^{かんのん}扉^{びらき}を八文字に、格子も嵌^はめぬ祠^{ほこら}がある。ために字^{あざ}を熊坂とて、俗に長範の産地と称^とえる、巨盗の出処は面白い。祠は立^た場^ばに遠いから、路^{みち}端^{ばた}の清水の奥^{おく}に、蒼^{あお}く蔭^{かげ}り、朱に輝く、活^いけるがごとき大盗賊の風^{ふう}采^{さい}を、車の上からがたがたと、横^{なが}に視^みめて通つた事こそ。われ御曹子^{おんぞうし}ならねども、この夏休みには牛首を徒^ち歩^{あるき}して、菅笠^{すげがさ}を敷いて対面しよう、とも考えたが、ああ、しばらく、この栗殻の峠には、謂^いわれぬ可^な懐^{つかし}い思^{おも}い出^{いで}があつたので、越^え中^{ちゆう}境^{かうき}へ足を向けた。——

処^{ところ}を、牛の首に出会つたために、むしろその方が興味があつたかも知れないと、そぞろ

に心の迷つた端を、隱身寂滅、地獄が消えた牛妖に、少なからず驚かされた。正体が知れてからも、出遊の地に一一心を持つて、山靈を蔑にした罪を、慇懃にこの神聖なる古戦場に対つて、人知れず慚謝したのである。

立向う山の茂から、額を出して、ト差覗く状なる雲の峰の、いかにその裾の広く且つ大なるべきかを想うにつけて、全体を鵜呑にしている谷の深さ、山の高さが推量られる。辿るほどに、洋傘さした蟻のよう——蝉の声が四辺に途絶えて、何の鳥かカラカラと啼くのを聞くと、ちよつとその嘴にも、人間は胴中を横脚えにされそうであつた。

谷が分れて、森が涼しい。

右手の谷の片隅に、前に見た牛の小家が、小さくなつて、樹立ありとも言わず、真白に日が当る。

やがて、二分が処上つた。

坂路に……草刈か、鎌は持たず。自然薯穿か、鋏も提げず。地柄縞柄は分らぬが、いずれも手織らしい単放を裙短に、草履穿で、日に背いたのは緩かに腰に手を組み、日に向つたのは額に手笠で、対向つて二人——年紀も同じ程な六十左右の婆々が、暢気らしく、我が背戸に出たような顔色して立つていた。

山逕さんけいの磯ぎょうかく、以前こそあれ、人通りのない坂は寸裂すたすた、裂目に草生い、割目に薄すすきの丈伸びたれば、蛇へびの衣きぬを避よけて行ゆく足許あしもとは狭せままって、その二人の傍わきを通とほる……肩は、一人と擦すれ擦すれになつたのである。

ト境の方に立つたのが、心持身体からだを開いて、頬ほおの皺しわを引伸ひんのばすような声を出した。

「この人はや。」

「おいの。」

と皺しわ枯れた返事を一人が、その耳の辺あたりの白髪しろがが動く。

「どこの人すら。」

「さればいの。」

と聞いた時、境は早や二三間、前途むじょうへ出ていた。

で、別に振り返ろうともしなかつた——氣に留めるまでもない、居まわりには見掛けない旅の姿を怪しんで、咎とがめるともなく、声高に饒舌しやべつたろう、——それにつけても、余り往來ゆききのないのは知れた。

けれども、それからというものは、遠い樹立の蔭に、朦朧もうろうと立ったり、間近な崖へ影が射さしたり、背後うしろからざわざわと芒すすきを搔かきわ分ける音がしたり、どうやら、件の二人の媪おうなが、

附絡つぎまとっているような思おもがした。ざつと半日の余、他ほかに人らしいものの形を見なかつたために、何事も無い一對の白髪首が、深く目に映つて消えなかつた、とまず見える。

四

ひぐらし 蝸かが谷やになつて、境は杉の梢こすえを踏む。と峠は近い。立向う雲の峰はすつくと胴あたを踴あわして、灰色おおいに大なる薄墨うすすみの斑まだらを交え、動かぬ稲妻うねを畝うねらした状は凄じい。が、山々の緑が迫つて、むくむくとある輪廓りんかくは、霄おおぞらとの劃くぎりを蒼あおく、どこともなく嵐氣らんきが迫つて、幽かすかな谷川ながれの流ながれの響なぎに、火の雲の炎の脈も、淡く紫に彩られる。

また振返つて見れば、山の裾と中空との間に挟わまつて、宙に描かれた遠里とゝざとの果はなる海の上に、落ち行く日ゆの紅くれないのがみに映つて、そこに蟠わたつた雲の峰は、海月くらげが白く浮べる風情なら。蟻あを列ならべた並木の筋に……蛙かのごとき青田あおたの上に……かなたこなた同じ雲の峰四つ五つ、近いのは城やぐらの櫓やぐら、遠のろきは狼煙なの余波なごりに似て、ここにある身は紙鳶たこに乗つて、雲かけの棧渡はしる心地こす。

これから前さきは、坂さかが急に嶮けわくなる。……以前いぜん車の通つた時も、空からでないと曳ひ上げられな

かつた……雨降りには滝になろう、縦に藜研形に崩込んで、人足の絶えた草は、横ざまに生え繁つて、真直に杖ついた洋傘と、路の勾配との間に、ほとんど余地のないばかり、蔦蔓も葉の裏を見上げるように這懸る。

それは可い。

かほどの処を攀上るのに、あえて躊躇するのではなかったが、ふとここまで来て、出足を堰止められた仔細がある。

山の中の、かかる処に、流灌頂ではよもあるまい。路の左右と真中へ、草の中に、三本の竹、荒縄を結渡したのが、目の前を遮った、——麓のもの、何かの禁厭かとも思ったが、紅紙をさした箸も無ければ、強飯を備えた盆も見えぬ。

「可訝いな。」

考えるまでもない、手取り早く有体に見れば、正にこれ、往来止。

して見ると、先刻、路を塞いでゐんだ、媼の素振も、通りがかりに小耳に挟んだ言の端にも、深い様子があるのかも知れぬ。……土地の神が立たせておく、門番かとも疑われる。が、往来止だけで済ましてはいられぬ。もしその意味に従えば、……一寸先へも出られぬのである。

もつとも時経つたか、竹も古びて、縄も中弛みがして、草に引摺る。跨いで越すに、足を挙ぐるまでもなかつたけれども、路に着けた封印は、そう無雑作には破れなかつた。前後をしながら、密とその縄を取つて曳くと、等閑に土の割目に刺したらしい、竹の根はぐらぐらとして、縄がずると手繰られた。慌てて放して、後へ退つた。——

一对の媪が、背後で見張るようにも思われたし、縄張の動く拍子に、矢がパツと飛んで出そうにも感じたのである。

いや、名にし負う俱利伽羅で、天にも地にもただ一人、三造がこの挙動は、われわれ人間としては尋常事ではない。手に汗を握る一大事であつたが、山に取つては、蝗が飛ぶほどでもなからう。

境は、今の騒ぎで、取落した洋傘の、寂しく打倒れた形さえ、まだしも娑婆の朋達のような頼母しさに、附着いて腰を掛けた。

峰から落し、谷から推して、夕暮が次第に迫つた。雲の峰は、一刷刷いて、薄黒く、坊主のように、ぬつと立つ。

日が蔭つて、草の青さの増すにつけ、汗ばんだ単衣の縞の、くつきりと鮮明になるのも心細い——山路に人の小ささよ。

蜻蛉とんぼでも来て留まれば、城さかの逆茂木かもしぎの威嚴いげんを殺ころいで、抜いて取つても棄すつべきが、寂じやく

寞まくとして、三本竹、風も無ければ動きもせず。

ひぐらし
蝸かたの音がする……………

五

カラカラと飴こだまして、谷こたの樹立こたちを貫ぬき貫ぬき、空へ伝わって、ちよつと途絶えて、やがて峰かたの方でカラカラとまた声が響く。

と、蝸かたの声ばかりでなく、新あらたに鐸すずの音ねが起つたのである。

ちりりんと——しかり、鐸すずを鳴らす、と聞いただけで、夏の山には、行者の姿が想像さうざうされて、境かたは少すくからず頼母たのもしかつた。峠には人が居る。

その実、山靈かなが奏かなでるので、次第々々に雲の底へ、高く消えて行く類たぐいの、深秘こなたな音楽ではあるまいか、と覺おぼ束つかなさに耳を澄ますと、確たしかに、しかも、段々に峰から此方こなたに近くなる。

蝸かたがそれに競わんとするごとく、また頻しきりに鳴き出す——足許あしもとの深い谷から、その銀しろがねの

鈴を揺ゆ上げると、峠から黄金こがねの鐸を振下ろして、どこで結ばるともなく、ちりりりと行交ゆきかうあたりは、目に見えぬ木この葉が舞い、霧が降る。

涼しさが身に染みて、鐸か、声か、音か、蝸ひぐらしの、と聞き紛まがうまで恍惚うっとりとなった。目め前に、はたと落ちた雲のちぎれ、鼠色の五尺の霧、ひらひらと立って、袖擦れにはつと飛ぶ。

「わっ。」

と云つて、境は驚駭おどろきの声を揚げた。

遮る樹立たての榎もあらず、霜夜に凍いてたもののごとく、山路へぬつくと立留まった、その一団の霧の中に、カラカラと鐸が鳴つたが、

「ほう——」

と鼻ふくろのような声を発した。面赭つらあかぐろ黒く、牙きば白く、両の頬くろみに胡桃を噛かみ破わり、眼まなこは大蛇おろちの穴のごとく、額の幅約一尺にして、眉は榮螺さざえを並べたよう。耳まで裂けた大口を開あいて、上から境を睨ねめ着けたが、

「これは、」

と云う時、かつしと片腕、肱ひじを曲げて、その蟹かにの甲羅こうらを面形めんがたに剥はいで取った。

四十余りの総髪で、筋骨逞ましい一漢子、——またカラカラと鳴った——鐸の柄を片手に持換えながら、

「思いがけない処にござった。とんと心着きませんで、不調法。」
と一揖して、

「面です……はははは面でござる。」

と緒を手首に、可恐い顔は俯向けに、ぶらりと膝に翻ったが、鉄で鑄たらしいその厳さ。逞ましい漢の手にもずしりとする。

「お驚きでございましたらうで、恐縮でござります。」

「はあ、」

と云うと、一刎ね刎ねたままで、弾機が切れたようにそこに突立っていた身構が崩れて、境は草の上へ投膝で腰を落して、雲が日和下駄穿いた大山伏を、足の爪尖から見上げて黙る。

「別に、お怪我は？」

手を出して寄つて来たが、腰でも抱こう様子に見えた。

「怪我なんぞ。」

境は我ながら可笑くなつて、

「生命にも別条はありません。」

「重 豊でござる。」

と云う、落着いて聞くと、声のやや掠れた人物。

「しかし大丈夫、立派な処を御目に懸けました。何ですか、貴下は、これから、」

「さよう、竹の橋をさして下山いたすでございます、貴辺はな。」

境は振向いて峠を仰いだ。目を突くばかりの坂の葎に、竹はすつくと立っている。

六

「ええ、日脚は十分、これから峠をお越しになつても、夏の日は暮れますまい——が、その事でござる、……さよう、その儀に就いて、」

境の前に蹲んだ時、山伏は行衣の胸に堆い、鬼の面が、襟許から片目で睨むのを推入れなどして、

「実は、貴辺よりも私がお恥かしい。臆病から致いかようなものを持出しましたで。

それと申すが、やはりこの往来止の縄張でございまするがな。ここばかりではのうて、峠を越しました向うの坂、石動いするぎから取附とつつきの上り口のぼにも、ぴたりと封じ目の墨があるでござります。

仔細しさいあつて、私は、この坂を貴辺あなた、真暗まつくら三宝さんぼう駆下りましたで、こちらのこの縄張は、今承りますまで目にも入らず、貴辺がお在いでなさる姿さえ心着かなんだでござります。

が、あちらのは、風説うわさにも聞きますれば、私も見ました、と申しますが、そこからさまで隔てませぬ、石動の町をこの峠の方へ、人里離れました処やまごもに、山籠りを致しております。

不動堂の先達だと云う。それでその鐸すずも、雲のような行衣も解よめた。

「御免下され、」

とここで、鐸さかさまを倒たかに腰こしにさして、袂たもとから、ぐったりした、油臭かますい、吠たばこいれの煙草入たばこいれを出して、真鍮しんちゆうの煙管きせるを、ト隔てなく口ごと持つて来て、蛇の幻のあらわれた、境の吸う巻ま蓑きたばらで、吸附きつけながら、

「赫かつと気ばかり上のぼつて、ざつと一日、好すきな煙草もよう喫のみません。世に推事おしごとというは出来ぬもので、これがな、腹に底があつてした事じやと、うむと堪こらえるでござりましょうが、

好事ものずき半分の生兵法なまびようほう、豪えらく汗を掻かきました。」

「峠とがに何事があったんですか。」

「されば。」

すばすばと二三服、さも旨うまそうに立続けに行者は、矢継早おとやに乙矢つがを番つがえて、

「——ございました。」

「どんな事ですか。」

少し急せきこ込んで聞きながら、境たては楯たてに取とつた上のぼりざか坂かを見返みかつた。峠おとを蔽おほう雲の峰は落日なごりの余光なごりに赤し。

行者ぎやくの頬も夕焼けて、

「順じゆんに申まをさんと余あまり唐突たうとつでございませう——一体かようでございませう。」

峠とがで力ちから餅もちを売うりました、三四軒茶屋旅籠はたごのございませう、あの広場ひろつばな、……俗しやくに

猿ヶ馬場ぼんば——以前のほりくだり上さか下さかの旅人りやくじんで昌さかりました時分ときぶんには、何が故ゆゑに、猿ヶ馬場ぼんばだか、とん

と人力車ぢゆうりくしやの置場おきばのようようでございませう、御存ごぞんじの汽車きしやが、この裾すそを通とほるようようになりまし

てからは、富山の薬売やくうり、城端じやうはなのせり呉服きふくも、碌ろくに越こさなくなりまして、年一年、その

寂さびれ方かたというものは、……それこそまた、猿えんどもが寄合場よりあひばになつたでございませう。

ところで、峠の茶屋連中、山家ものでも商人は利に敏い——名物の力餅を乾餅にし
 て貯えても、活計の立たぬ事に疾く心着いて、どれも竹の橋の停車場前へ引越しまして、
 袖無しのちゃんちゃんこを、裾の長い半纏に着換えたでござります。さて雪国の山家と
 て、桁梁、敵丈な本陣擬、百年経つて石にはなつても、滅多に朽ちる憂はない。それだ
 けにまた、盗賊の棲家にでもなりはせぬか、と申します内に、一夏、一日晩方から、や、
 もう可恐く羽蟻が飛んで、麓一円、目も開きませぬ。これはならぬ、と言う、口へ入る、
 鼻へ飛込む。蚊帳を釣つても寢床の上をうようよと這廻る——さ、その夜あけ方に、あ
 れあれ峠を見され、羽蟻が黒雲のように真直に、と押魂消る内、焼けました。

残つたのがたつた一軒。

いずれ、山拵ぎのものか、乞食どもの疎である。焼残つた一軒も、そのままにし
 ておいては物騒じやに因つて、上段の床の間へ御仏像でも据えたなら、構は大い。そのま
 ま題にして、俱利伽羅山焼残寺が一院、北国名代の巡拝所——
 と申す説もござりました。」

「ところが、買手が附いたのでござりましてな。随分広い、山ぐるみ地所附だと申す事で
」

行者がちよいと句切つたので、

「別荘にでもなりましたか。」

煙管を揮つて、遮るごとく、

「いや、その儀なら仔細はござらん、またどこの好事じゃと申して、そんな峠へ別荘で
もござりますまい。……まず理窟は措いて、誰だか買主が分らぬでございます。第一その
話がござつてから、二人や、三人、ぽつぽつ峠を越したのももございませうが、一向に人の
住んでいる様子は見えぬという事で。ただ稀代なのは、いつの間にやら雨で洗つたように、
焼跡らしい灰もなし、焚さしの材木一本横わつておらぬばかりか、大風で飛ばしたか、
土礎石一つ無い。すらりと飯櫃形の猿ヶ馬場に、吹溜まった落葉を敷いて、閑々と静
まりかえつた、埋れ井戸には桔梗が咲き、薄に女郎花が交つたは、薄彩色の褥のよ
うで、上座に猿丸太夫、眷属すらりと居流れ、連歌でもしそうな模様じゃ。……（焼
撃をしたのも九十九折の猿が所為よ、道理こそ、柿の樹と栗の樹は焼かずに背戸へ残し

たわ。……などと申す。

山家徒やまがであいでござるに因つて、何か一軒家を買取つたも、古猿の化けた奴やつむかし。古この猿ケ馬場には、渾名あだなを熊坂くまさかと言つた大猿があつて、通行の旅人を追剥おいはがし、石動いするぎの里へ出て、刀の鏢つばで小豆餅あずきもちを買つたとある、と雪の炉端ろばたで話が積つもる。

トそこら白いものばかりで、雪上ゆきじょうろう臈ろうは白無垢しろむくじゃ……なんぞと言う処から、裾そでが出来たものと見えまして、近頃峠の古屋には、世にも美しい婦おんなが住すまう。

人が通ると、猿ケ馬場に、むらむらと立つ、靄もや、霞、霧の中に、御殿女中の装おんないした婦おんなの姿がすつと立つ——

見たものは命がない。

さあ、その風説うわさが立ちますと、それからこつち兩三年、悪いと言うのを強いて越して、麓ふもとへ下りて煩うのもあれば、中には全く死んだもござる。……」

「まつたく?」

とハタと巻まき蓑たばこを棄すてて、境は路傍みちばたへ高く居直る。

行者は、掌てのひらで、鐸すずの蓋ふたして、腰を張つて、

「さればその儀で。——

隣村も山道半里、谷戸一里、いつの幾日に誰が死んで、その葬式に参つたというでもござらぬ、が杜鵑の一声で、あの山、その谷、それぞれに聞えまする。

地体、一軒家を買取つた者というのも、猿じゃ、狐じゃ、と申す際に、停車場前の、今、餅屋で聞くか、その筋へ出て尋ねれば、皆目知れぬ事はござるまい。が、人間そこまではせぬもので、火元は分らず、火の粉ばかり、わッぱと申す。

さらぬだに往来の途絶えた峠、怪い風説があるために、近来ほとんど人跡が絶果てました。

ところがな、ついこの頃、石動在の若者、村相撲の関を取る力自慢の強がり、田植が済んだ祝酒の上機嫌、雨霽りで元氣は可、女小児の手前もあつて、これ見よがしに腕を扼つて——己が一番見届ける、得物なんぞ、何、手掴みだ、と大手を振つて出懸けたのが、山路へかかつて、八ツさがりに、私ども御堂へ寄つたでござります。

そこで、御神酒を進ぜました。あびらうんけんそわかと唱えて、押頂いて飲んだですて

……

(お気をつけられい。)

と申して石段を送つて出ますと、坂へ立身上りに片足を踏伸ばいて、

(先達、訳あねえ。)

と向むこう願はちまき巻まきしたのであります——はてきて、この気構きくまえでは、どうやら覚おぼつか束つかないと存ぞんじながら、連つれにはぐれた小相撲こすもうという風に、源氏車げんじぐるまの首くび拔ぬき浴衣ゆかたの諸肌脱もろはだぬぎ、素足すそに草わらじ鞋穿げんぎ、じんじん端折はしよりで、てすけとくたく峠とげへ押おし上のぼる後うしろ姿つきを、日脚ひあしなりに遠く蔭かげるまで見送りしましたが、何が、貴辺あなた、」

「え、その男は？」

八

先達は洩面ひそまへして、

「まず生命いのちに別条いりぢのないばかり、——日が暮くれましたで、私御本堂てまえへだけ燈明とうめいを点つけました。で、縁えりの端はたで……されば四日頃よひごろの月つきをこう、」

手廂てびさしして、

「森あいの間まから視ながめていますと、けたたましい音を立たてて、ぐるぐる舞まいじや、二三度立樹たちぎに打ぶつかりながら、件くだんのその昼間ひるまの妖物ばけもの退治たいぢが、駆か込んで参まゐりました。

(お先達、水を一口、)

と云うと、のめずって、低い縁へ、片^{かたひじ}肱^{ひじ}かけたなり尻餅^{しりもち}を支^さいたが、……月明りで見
るせいではござらん、顔の色、真^ま蒼^{さう}でな。

すぐに岩清水を月影に透かして、大茶碗に汲^くんで進ぜた。

(明王のお水でござる……しつかりなされ。)

と申したが、こつちで口^{あて}へ当^あがつてやらすには、震えて飲めなんだでござります。
やっと人心地^{にんしんぢ}になつた処で、本堂^{ほんだう}傍^{わき}の休息所^{きゅうしきじよ}へ連^つ込みました。

処^{ところ}で様子を尋ねると、(そ、その森の中、垣根越、女の姿がちらちらする、わあ、追懸^{おっか}
けて来た、入^いつて来る……閉^ほめて欲^ほい。)と云うで、ばたばた小窓^{こまど}など塞^ふぎ、赫^かと明^あくと
も参^まらんが、煤^{すす}けたなりに洋燈^{ランヅ}も点^つけたて。

少々^{もともと}落着^{おち}いての話^{はなし}では——勢^{いきおい}に任^ませて、峠^{とが}をさして押上^おつた、途中^{ちゆうちゆう}別に仔細^{しきさい}はござらん。
元^{もと}来^{もと}、そこから引返^{ひきかへ}そうというではなく、猿ヶ馬場^{さるがばば}を、向^{むか}うへ……

というのが、……こちらで、」

と煙管^{たばこ}の尖^{さき}で草^{くさ}を圧^{おさ}え、

「峠^{とが}越^こし竹の橋^{たけのはし}へ下^{くだ}りて、汽車^{きしや}で帰^{かへ}ろう了^り簡^{けん}。ただただ、山^{やま}一つ越^こせば可^いいわ、で薄^{すす}き

焼石、踏だいに、……薄暮合——猿ヶ馬場はがらんとして、中に、すつくりと一軒家が、何か大牛が蟠まったような形。人が開けたとは受取れぬ、兩戸が横に一枚と、入口の大戸の半分ばかり開いた様子が、口をぱくりと……それ、遣つた塩梅。根太ごと、がたがたと動出しもし兼ねんですて。

そいつを睨みつけて、右の向顛巻、大肌腕で通りかかると、キチキチ、キチキチと草が鳴る……いや、何か鳴くですじや、……

蟋蟀にしては声が大いぞ——道理かな、鼬、かの鼬な。

鼬でござるが、仰向けに腹を出して、尻尾をぶるぶると遣つて、同一処をごろごろ廻る。

ついで、路傍の足許故に、

(叱! 叱!)

と追つてみたが、同一処をちよつとも動かさず、四足をびりびりと伸べつ、縮めつ、白い面を、目も口も分らぬ真仰向けに、草に擦つけ擦つけて転げる工合が、どうも狗ころの戯れると違つて、焦茶色の毛の火になるばかり、悶え苦むに相違ござらん。

大蛇でも居て狙うか、と若い者ちと恐気がついたげな、四辺に紛いそうな松の樹もなし、天窓の上から、四斗樽ほどな大蛇の頭が覗くというでもござるまい。

なお熟と瞻ると、何やら陽炎のようなものが、鼬の体から、すつと伝わり、草の尖をひらひらと……細い波形に靡いている。はてな、で、その筋を据眼で、続く方へ辿つて行くと……いや、解めました。

右の一軒家の軒下に、こう崩れかかった区劃石の上に、ト天を睨んだ、腹の上へ両方の眼を凸、シャ！と構えたのは暮で——手ごろの沢庵庄ぐらいあろうという曲者。吐く息あたかも虹のごとく、かつと鼬に吹掛ける。これとても、蚊や蜂を吸うような事ではござらん、式のごとき大物をせしめるで、垂々と汗を流す。濡色が蒼黄色に夕日に光る。

怪しさも、凄さもこれほどなら朝茶の子、こいつ見物と、裾を捲つて、蹲み込んで、
(負けるな、ウシ、)

などと面白半分、鼬殿を煽つたが、もう弱つたか、キチキチという声も出ぬ。だんだんに、影が薄くなつたと申す事で。」

「その内に、同じく伸つ、反つ、背中を橋に、草に頸、窪を擦りつけながら、こう、じりりじりりと手繰られる体に引寄せられて、心持動いたげにごぎいました。

発奮はずんで、ずるずると来た奴が、若衆わかいしゅの足許で、ころりと翻かえると、クシヤツと異変な声を出した。

こいつ嗅かがされては百年目、ひよいと立つて退すつたげな、うむと呼吸いきを詰めていて、しばらくして、密そつと嗅ぐと、芬ぶんと——貴辺あなた。

ここが可訝おかしい。

何とも得知えれぬ佳いい薫かおりが、露出むきだしの胸むねに冷ひやりとする。や、これがために、若衆わかいしゅは清涼劑きつつけを飲んだように気が變つて、今まで傍目わきめも触ふらずにいました臺ひきがえるの虹にじを外して、フト前途むこうを見る、と何と、一軒家の門かどを離れた、峠ついでの絶頂いただき、馬場の真中まんなか、背後うしろへ海のような蒼空あおぞらを取廻ついでして、天涯ついでに衝立ついでめいた医王山いおうせんの巔いただきを背負しょい、颯さつと一幅ひとば、障子しょうしを立てた白しろい夕靄ゆうもやから半身あらかを頭あたまわして、錦にしきの帯たしは確しかに見た。……婦人おんなが一人……御殿女中の風かぜをして

——顔を合わせた。——

「御殿女中の？……」

と三造は聞返す。

「お聞きなされ、その若衆わかいしゅの話でござって——ト見ると、唇がキラキラと玉虫色、…それが、ほつちり燃えるように紅あかくなつたが、莞爾にっこりしたげな。

若衆は、一支えもせず、腰を抜いたが、手を支く間もない、仰向けあおのに引くりかえる。独りひつでに手足が動く、ばたばたはじまる。はッあア、鼯おんなじの形と同一じゃ。と胸を突くほど、足が窘むすく、手が縮まる、五体を手毬てまりにかがられる……六万四千の毛穴から血が颯さつと霧になつて、件くだんのその紅い唇を染めるらしい。草に頸うなじを擦着け擦着け、

(お助け下さい、お助け!) ……

と頭あたまで尺取つて、じりじりと後退あとずさり、——どうやらちつと、緊しめつけられた手足の筋の弛ゆるんだ処で、馬場の外れへ俵あたま転がし、むつくりこと天窓あたまへ星を載せて、山端やまばなへ突立つたつ、と目が眩くらんだか、日が暮れたか、四辺あたりは暗くなつて何も見えぬ。

で、見返りもせず、逆落もとし、旧の坂をどどッと駆下りる——いやもう途中、追々もの色が分るにつけ、山やま 茨いばらの白いのも女の顔あらに顕あらわれて、呼吸いきも吐つけずに遁にげた、——と申す。

若衆うちは話の中うちも、わなわなと齒の根が合あわぬ。

(生血いきちを吸われた、お先達、ほう、腕が冷い、氷のようじゃ。)

と引被ひつかぶせてやりました夜具の襟から手を出して、情なさけなさそうに、銀の指環ながを視める処が、とんと早や大病人おぢやでな。

お不動様の御像おすがたの前へ、かんかん燈明を点じまして、その夜よは一晩てまえ、私が附添つまつたほどこござります。

峠越し汽車に乗つて帰ると云うたで、その夜は帰らないのを、村の者も、さまで案じずにいましたげな。午過ひるぎてから四五人連立つて様子を見に参つたのが、通りがかり、どや御堂みどうへ立寄りましたに因つて、豪傑はその連中に引渡して、事済んだでござります。

が、唯ただいま今もお尋ねの肝腎あやしのその怪い婦人が、姿すがた容かたち、これがそれ御殿女中と申す一件——振袖ふりそでか詰袖つめそでか、裙模様すそでも着てござつたか、年とし紀しごろは、顔立は、髪は、島田とやらか、それとも片はずしというようなことから、委くわしく聞いてみたでござりますが、当人その辺はまるで見境みさかいがございませぬ。

何でも御殿女中は御殿女中で、薄あおら蒼あおいにどこか黄味きがかつた処のある衣物きもので、美しく底光りうわさがしたと申す。これはな、臺の色が目に映つて、それが幻に出たらしい。

して見ると、風説うわさを聞いて、風説うわさの通り、御殿女中、と心得たので、その実確たしかにどんな

姿だか分りませぬ。

さあ、是沙汰は 大業で、……

(朝疾う起きて空見れば、

口紅つけた 上臈が、)

と村の小児は峠を視める。津幡川を漕ぐ船頭は、(笄さした黒髪が、空から水に映る)
と申す、——峠の婦人は、里も村も、ちらちらと遊行なさる……」

十

「その替り村里から、この山へ登るものは、ぼったり絶えたでありましてな。」

「それで、」

聞惚れていた三造は、ここではじめて口を入れたが、

「貴下が、探険——山開きをなさいましたんですね。」

先達は額に手を当て、膨れた懐中を伏目に覗いて、

「御意で、恐縮をいたします……さような行力がありますかい。はッはッ、もつとも

足は達者で、御覽の通り日和下駄^{ひよりげた}じゃ、ここらは先達めきましたな。立山^{たてやま}、御嶽^{おんたけ}、修行^{はいす}にならば這摺^{はいす}つても登りますが、秘密の山を人助けに開こうなどはもつての外の事でござる。

また早い話が、この峠を越さねばと申して、多勢^{たせい}のものが難渋^{なんじゆ}をするでもなし、で、聞いたままのお茶話。秋にでもなつて、朝ぼらけの山の端^はに、ふと朝顔でも見えたらら、さてこそさてこそ高峰^{たかね}の花と、合点^{がってん}すれば済みます事。

処を、年効^{としがい}もない、密^{まつ}と……様子が見たい漫ろ^{そぞ}ろ心で、我慢がならず企てました。

それにいたせ、飛んだ目には逢いとうござらん心得から、用心のために思いつきましたはこの一物、な、御覽の通り、古くから御堂^{みどう}の額面^{みづら}に飾つてござります獅^{しか}噛^{かみ}面、——待て待て対手^{あいて}は何にもせよ、この方鬼の姿で参らば、五枚^{ごまい}鍬^{くわ}を頂いたも同然、同じ天窓^{あたま}から一口でも、変化^{へんげ}の口に幅つたかろうと、緒だけ新しいのを着けたやつを、苛高^{いらだか}がわりに手首にかけて、トまず、金剛杖を突立てて、がたがたと上りました。約束通り、まず何事もなく、峠へかかったでござります。」

「猿ヶ馬場へ、」

「さようで、立場^{たてば}の焼跡へ、」

「はあ成程。」

「繩張のあります処から、ここぞともはや面を装い、チャクと黒鬼に構えました。

仔細なく、鼻の穴から麓まで見通し、濶と睨んだ大の眼は、ここの、」

と額に皺を寄せて、

「汗を吹抜きの風通し……さして難渋にもござらなんだが、それでも素面のようではない。一人前、顔だけ背負つて歩行く工合で、何となく、坂路が抄取りません。

馬場へ懸ると、早や日脚が摺つて、一面に蔭つた上、草も手入らずに生え揃うと、綺麗に敷くでござりましてな、成程、早咲の桔梗が、ちらほら。ははあ、そこらが埋井戸か……薄がざわざわと波を打つ。またその風の冷たさが、颯と魂を濯うような爽快いだものではなく、気のせいか、ぞくぞくと身に染みます。

おのれ、と心をまず丹田に落つけたのが、気ばかりで、炎天の草いきれ、今鎮まろうとして、這廻るのが、むらむらと鼠色に匂つて染めるので、変に幻の山を踏む——下駄の歯がふわふわと浮上る。

さあ、こうなると、長し短し、面被りでござるに因つて、眼は明いが、面は真暗、とんと夢の中に節穴を覗く——まず塩梅。

それ、躓くまい、見当を狂わすなど、俯向きざまに、面をばくばく、鼻の穴で撓める様子が、クン、クンと嗅いで、

(やあ人臭いぞ。)

と吐きそうな。これがさ、峠にただ一人で遣る挙動じゃ、我ながら攫われて魔道を一
人旅の異変な体。」

「まったく……ですね。」

と三造は頷いたのである。

「な、貴辺、こりやかような態をするのが、既にものに魅せられたのではあるまいか。は
て、宙へ浮いて上るか、谷へ逆様ではなかるうか、なぞと怯気がつくど、足が窘んで、
膝がつくり。」

ヤ、ヤ、このまんまで、窮いては山車人形の土用干——堪らんと身悶えして、何のこれ、
若衆でさえ、婦人の姿を見るまでは、向願巻が弛まなんだに、いやしくも行者の
身として、——」

「ごもつともですね。」

ちとこれが不意だったか、先達は、はたと詰つて、擦たい顔色で、

「痛入ります、いやしくも行者の身として……そのしだらで、」

境は心着いて、気の毒そうに、

「いいえ、いいえ。」

「何、私もその気で仰有つたとは存じませぬがな、はッはッはッ。」

笑事ではござらぬ。うむとさて、勇気を起して、そのまま駆下りれば駆下りたであ

りませんが、せつかくの処へ運んだものを、ただ山を越えたでは、炬燵櫓を跨いだ同然、

待て待て禁札を打つて、先達が登山の印を残そうと存じましたで、携えました金剛を、一

番突立てておこう了。簡。

薄の中へぐいと入れたが、ずぶりと参らぬ。草の根が張つて、ぎしぎしいう、こじつた

が刺りません。えいと杖の尖で捏ねる内に、何の花か、底光りがして艶を持った黄色いの

が、右の突捲りで、薄なりに、ゆらゆら揺れたと思うと、……」

「おおー！」

「得も言われぬ佳い匂がしました。はてな、あの一軒家の戸口を覗くと、ちらりと見えた——や、その艶麗なことと申すものは。——

時ならぬ月が廂から衝と出たように、ぱつと目に映るといふと、手も足も突張りしました。必ず、どんな姿で、どんな顔立じやなぞとお尋ね御無用。まだまだ若衆の方が間違いにもいたせ、衣服の色合だけでも覚えて来たのが目つけものじや。いやはや、私の方はただ颯と白いものが一軒家の戸口に立ったと申すまでで——衣服が花やら、体が雪やら、さような事は真暗三宝、しかも家の内の暗い処へ立たれた工合が、牛か、熊にでも乗られたよう
でな、背が高い。

(鬼じや、)

と、私一つ大声を上げました。

(鬼じや、鬼じや。)

と、こうぬつと腕を突張った。金剛杖を棄置いて、腰の据らぬ高足をと踏んで、躍りあがるようにその前を通った、が、可笑い事には、對方が女性に因つて、いつの間にか、自分ともなく、名告が慇懃になりました。……

(鬼でござる。)

と夢中で喚わめいて、どうやら無事に、猿ヶ馬場は抜けました。で、後はこの坂一なだれ、
転まげるように駆下りたでございます。――

処で、先刻の不調法、

と息を吐つき、

「何とも、恥を申さぬと理が聞えませぬ、仔細しさいはこうでござります――が、さて同一人間
……も変なれども、この際……とでも申すかな、その貴辺あなたを前に置いて、今お話をします
る段になるといふと、いや、我ながらあんまりな慌て方、此方こなたこそ異形を扮装いでたちをしまし
たけれども、彼方あなたは何にせよ女体でござる。風説うわさの通り、あの峠茶屋の買主の、どこのか
好ものずき事な御令嬢が住居すまいいたさるでも理は聞える。よしや事あるにもせい、いざと云う時
に通出にげだしましても可よさそうなものじゃつたに……

……と申すがやはり、貴辺あなたにお目に掛かりましてからの分別で。ぱつと美しいもので目が
眩くらみました途端には、ただ我を忘れて、

(鬼じゃ。)

と拳こぶしを握にぎりました。

これだけでは、よう御合点はなりませんまいで、私てまえのその驚き方と申すものは、変った処

に艶麗あでやかな女中の姿とだけではござらぬ。日の蔭かげりました、俱利伽羅峠きりがらとうげの猿ヶ馬場さるがばばで、山さ気んきの凝こつて鼠色ねずみいろの霏もやのかかりました一軒家いっけんか、廂ひあわい合あから白昼ひやくちゆう、時ならぬ月つきが出たのに仰天おうえんした、と、まず御推量ごすいりやうが願ねがいたい——いくらか、その心持こころもちが……お分わかりになりましたようかな。」

十二

「分わかりました。」

と三造さんぞうは衣紋えもんを合あわせて、

「何なにですか、その一軒家いっけんかというのは、以前の茶屋ちやなんでしょう、左側ひだりがはの……右側みぎがはのですか。」

「御存ごぞんじかな。」

「たびたび通とほつて知しっています。」

「ならば御承知ごしょうちじや。右側みぎがはの二軒目にけんめで、鍵屋かぎやと申まをしたのが焼残やけどのこっておりませんが。」

「鍵屋、——二軒目にけんめの。」

と云つて境は俯向いた。峠に残つた一軒家が、それであると聞くまでは、あるいは先達とともに、旧来た麓へ引返そうかとも迷つたのである。

が、思う処あつて、こう聞くと直ぐに心が極つた。

様子は先達にも見て取られて、

「ええ、鍵屋なら、お上りになりますかな。」

「別に、鍵屋ならばというのじやありませんが。これから越します。」

と云つて、別離の会釈に頭を下げたが、そこに根を生して、傍目も触らず、黙っている先達に、気を引かれずには済まなかつた。

「悪いんですか、参つては。」

山伏は押眠つた目を瞬いて開けた。三造を右瞻左瞻で、

「お待ち下さい。血気に逸り、我慢に推上ろうとなさる御仁なら、お肯入れのないまでも、お留め申すが私年効ではありますが、お見受け申した処、悪いと言えば、それでもとはおっしゃりそうもない。その御心得なれば別儀ござるまいで、必ず御無用とは申上げん。

峠でその婦人を見るものは……云々と恐るべき風説はいたすが、現に、私とても御覽

のごとく別条はないようで、……折角じゃ、いつそのことお出が宜しい。」

「ああ、それはどうも難有い。」

と三造は礼を云う。許されたような気がしたのである。

「や、や、」

先達も立構えで、話の中に撈つて落した道芝の、帯の端折目に散りかかった、三造の裾を二ツ三ツ、煽ぐように払いてくれた。

「ところで、」

顔を振つて四辺を見た目は、どつちを向いても、峰の緑、処々に雲が白い。

「この日脚じゃ、暮切らぬ内峠は越せませす、が坂は暗くなるでござろう。——急ぎの旅ではなからうで、手前お守りをいたす、麓の御堂で御一泊のように願います。無事にお越しの御様子も伺いたい。留守には誰も居らず、戸棚には夜具一組、蚊帳もござる。」

私は、急いで、竹の橋まで下りますで、汽車でぐるりと一廻り、直ぐに石動から御堂へ戻ると、貴辺はまだ上りがある。事に因ると、先へ帰つて茶を沸して相待てます。それが宜しい、そうなさつて。ああ、御承知か。重畳々々。

就きましては、」

かさかさと胸を開いて、仰向けに手に据えた、鬼の面は、紺青の空に映つて、山深き徑に幽なる光を放つ。

「先生方にはただの木の面形でござれども、現に私が試みました。驚破とある時、この目を通して何事も御覧が宜しい。さあ、お持ちなさるよう。」

三造は猶予いつつ、

「しかし、御重宝、」

「いや、御役に立てば本懐であります。」

すなわち取つて、帽子をはずして、襟にかける、と先達の手に鐸が鳴つた。

「御無事で、」

「さようなら。」

蝸の声に風颯と、背を押上げらるるがごとく境は頭を峠に上げた。雲の峰は縁を浅葱、鼠色の牡丹をかさねた、頂白くキラキラと黄金の条の流れたのは、月がその裡に宿つたろう。高嶺の霞に咲くという、金色の董の野を、天上遙かに仰いだ風情。

西山日没東山昏。旋風吹馬馬踏雲。

低声に唱いかけて、耳を澄ますと、鐸の音は梢を揺つて、薄暗い谷に沈む。

十三

じよふざげをそぐくもくうにみつ
 女巫澆酒雲満空。 玉炉炭火香馨馨。 海神山鬼来座中。 紙銭※窶

しせんしつそつせんぢやうしほらちようきんぶらん
 鳴※風。 相思木帖金舞鸞。

さんがいつそうまたいつたん ほしをよびおにをめしはいばんをきんす さんみくろうときひとしんかんす
 攢蛾一※重 一 弾。 呼星召鬼歆杯盤。 山魅食時人森寒。

境の足は猿ケ馬場に掛つた。 今や影一つ、山の端に立つのである。

しゆうなんのにつしよくわんにひくし かみやとこしなえにうむのあいだにあり
 終南日色低平湾。 神兮長有有無間。

こし
 越の海は、雲の模様に隠れながら、青い糸の縫目を見せて、北国の山々は、皆黄昏の袖を連ねた。

「神兮長に有無の間にあり。」

まなこかつ
 胸を見ると、背中まで抜けそうな眼が潤と、鬼の面が馬場を睨んで、ここにも一人神が
 たたず
 入む、三造は身自から魔界を辿る思がある。

ふるみち
 峠のこの故道は、聞いたよりも草が伸びて、古沼の干た、蘆の茂かと疑うばかり、黄
 にも紫にも咲交じつた花もない、——それは夕暮のせいもあるう。が第一に心懸けた、目

標しるしの一軒家は靄もやも掛からぬのに屋根も分らぬ。

場所が違つたかとも怪しんだ、けれども、蹈ふみまよ迷う路続きではない。でいよいよ進むとしたが、ざわざわ分入らねばならぬ雑草に遮られて、いぎ、と言う前、しばらくを猶ためら予うて立つと、風が誘つて、時々さらさらさらさらと、そこらの鳴るのが、虫の声の交らぬだけ、余計に響く。……

ひよっこり肌脱の若わか衆いしゆが、草鞋わらじ穿きで出て来そうでもあるし、続いて、山伏がのさのさと頭あつわれそうにもある。大方人の無い、こんな場所へ来ると、聞いた話が実際の姿になつて、目前めざきへ幻影まぼろしに出るものかも知れぬ。

現にそれ、それぞれ、若衆が、山伏が、ざわざわと出て、すつと通る——通ると……その形が幻を束つかねた雲になつて、颯さつと一つ谷へ飛ぶ。程もあらせず、むっくりと湧わいて来て、ふいと行くゆくと、いつの間にか、草の上へちぎれちぎれに幾つもある。中には動かじつずに凝じつと留すまつて、裾すその消えそうな山伏が、草の上に漂々として吹かれもやらず浮うくのさえある。またふわりと来て、ぱつと胸に当つて、はつとすると、他たわい愛あいもなく、形なく力もなく、袖そでを透うかして背後うしろへ通る。

三造は誘われて、ふらふらとなつて、ぎよつとしたが、つらつら見ると、むこうに立つ

た雲の峰が、はらはらと解けて山中へ拡がりつつ、薄の海へ波を乱して、白く翻って、しかも次第に消えるのであった。

「ああ、そうか……」

山伏は大跨で、やがて麓へ着いた時分、と、足許の杉の梢にかかった一片の雲を透かして、里可懐く麓を望んだ……時であった。

今昇った坂一畝り下た処、後前草がくれの径の上に、波に乗ったような趣して、二人並んだ姿が見える——齊く雲のたたずまいか、あらず、その雲には、淡いが彩があつて、髪が黒く、倂が白い。帯の色も、その立姿の、肩と裾を横に、胸高に、細りと劃つて濃い。道は二町ばかり、間は隔つたが、翳せばやがて掌へ、その黒髪が薰りそう。直ぐ眉の下に見えたから、何となく顔立ちの面長らしいのも想像された。

同時に、その傍のもう一人、瞳を返して、三造は眉を顰めた。まさしく先刻の婆らしい。それが、黒い袖の桁短かに、皺の想わるる手をぶらりと、首桶か、骨瓶か、風呂敷包を——包提げていた。

境が、上から伸懸るようにして差覗くと、下で枯枝のような手を出した。婆がその手を、上に向けて、横ざまに振って見せた。

たしかあいす
確に暗号に違いない、しかも自分にするのらしい。

「ええ。」

胸倉を取つて小突かれるように、強く此方へ応えるばかりで、見るなか、行けか、去れだか、来いだか、その意味がさっぱり分らぬ。その癖、烏が横啣えにして飛びそうな、厭な手つきだとしみじみ感じた。

十四

その内に……婆の手の傍から薄が靡いて、穂のような手が動いた。密と招いて、胸を開くと、片袖を搔込みながら、腕をしなやかに、その裾のあたりを教えた。

そこへ下りて来よ、と三造に云うのである——

意味は明かに、しかも優しく、美しく通じたが、待て、なぜ下へ降りよ、と諭す？

峠を越すな、進んではならぬ、と言うか。自分我にしか云うものが、婦人の身でどうして来た、……さて降りたらば何とする？ ずんずん行けば何とする？

すべてかかる事に手間隙取つて、とこうするのが魔が魅すのである。——構わず行こう。

「何だ。」

谿間の百合の大輪がほのめくを、心は残るが見棄てる気構え。踵を廻らし、猛然と飛入るがごとく、葎の中に躍込んだ。ざ、ざ、ざらざらと雲が乱れる。

山路に草を分ける心持は、水練を得たものが千尋の淵の底を探るにも似ていよう。どつと滝を浴びたように感じながら、ほとんど盲蛇でまっしぐらに突いて出ると、颯と開けた一場の広場。前面にぬつくり立つた峯の方へなぞえに高い、が、その峰は俱利伽羅の山続きではない。越中の立山が日も月も呑んで真暗に聳えたのである。ちようど広場とその頂との境に、一条濃い靄が懸った、靄の下に、九十九谷に介まった里と、村と、神通、射水の二大川と、富山の市が包まるる。

さればこそ思い違えた、——峠の立場はここなので。今し猿ケ馬場ぞと認めたのは、道を急いだ目の迷い、まだそこまでは進まなかつたのであつた。

紫に桔梗の花を織出した、緑は氈を開いたよう。こんもりとした果には、山の瘦せた骨が白い。がぼと、またさつくりと、見覚えた岩も見ゆる。一本の柿、三本の栗、老樹の桃もあちこちに、夕暮を涼みながら、我を迎える風情にイむ。

と見れば鍵屋は、礎が動いたか、四辺の地勢が露出しになつたためか、向う上りに、ず

ずんと傾き、大船を取つて一艘頂そうに据えたるごとく、巖いわにかつ寂しく、片廂かたびさしをぐいと、山の端はから空へ離して、舳みよしの立つた形して、立山の波を漕がんとす。境は可懐なつかしげに進み寄つた。

「や！」

その門口かどぐちに、美しい清水が流る。いや、水のような褌つまが溢こぼれて、脇明わきあけの肌ちらちらと、白い撫子なでしこの乱咲みだれざきを、帯で結んだ、浴衣の地の薄うすお納戸。

すらりと草に、姿横に、露を敷いて、雪の腕力かいななげに、ぐたりと投げた二の腕に、枕すともなく艶つやかな鬢びんを支えた、前髪を透く、清らかな耳許みみもとの、幽かすかに洩もれる俯向うつむき形なり、膝を折つて打伏した姿を見た。

冷い風が、衝つと薰かつて吹いたが、キキと鳴く鼯いたちも聞えず、その婦人おんなが蝦蟇がまにもならぬ。耳かが赫かと、目ばかり冴さえる。……冴えながら、草も見えず、家も暗い。が、その癖く件くだんの姿ばかりは、がつくり伸ばした頸うなじの白さに、毛筋が揃そろつて、後おくれ毛のはらはらと戦そよぐのまで、瞳に映つて透通る。

これを見棄てては駆抜けられない。

「もし……」

と言いもあえず、後方へ退つて、

「これだ！」

とつい出た口許を手で压える。あとから、込上げて、突ばじけて、

「……顔を見ると……のつぺらぼう——」

と思わずまた独言。我が声ながら、変に掠れて、まるで先刻の山伏の音。

「今も今、手を掉つた……ああ、頻りに留めた……」

と思うと、五体を取つて緊附けられる心地がした。

十五

けれども、まだ幸に俯向けに投出されぬ。

「触らぬ神に祟なし……」

非常な場合に、極めて普通な諺が、記憶から出て諭す。諭されて、直ぐに踏出して去ろうとしたが……病難、危難、もしや——とすれば、このまま見棄つべき次第でない。

境は後髪を取つて引かれた。

洋傘こつもりを支たいて、おずおずその胸むねに掛けた異形の彫刻物をまた視ながめた。——今しがた、ちぎれ雲の草くさを掠かすめて飛んだごとく、山伏やまぶしにて候まちものの、ここを過よぎつた事は確たしかである。確たしかで、しかもその顔かほには、この鬼おにの面おもてを被かぶつていた。——時に、門口かどへ露あられた婦人おんなの姿すがたを鼻はなの穴あなから覗のぞいたと云いうぞ。待まちてよ、繩張際じゆんぢやうぎの坂道さかぢでは、かくある我われも、ために慚すくなからず驚おどかされた。

おお、それだと、たとい須磨すまに居いても、明石あかしに居いても、姫御前ひめごぜは目めをまわそう。三造さんぞうは心着こころぢいて、夕露ゆふつゆの玉たまを鏤ちりばめた女の寝姿ねすがたに引返ひきかした。

「鬼おにじゃ。」

試こみに山伏やまぶしの言ことばを繰返くりかして、まさしく、怯おびかされたに相違あはないと思おもつた。

「鬼おにじゃ。……」

と一足いっさく出てまた眩くらいたが、フト今度は、反対はんたいに、人ひとを警いましむる山伏やまぶしの声こゑに聞きえた。勿なれ、彼は鬼おになり、我われに与よえし予言よげんにあらなずや。

境さかいは再またび逡巡すんじゆんした。

が、凝じつと瞻みめて立たつと、衣きぬの模様もようの白しろい花はな、撫子おもかげの俯うつも、一いっ目の時ときより際ぎ立たつて、伏ふし隠かくれた膚はだの色いろの、小お草くさに搦からんで乱みだれた有あり様さま。

手に触ると、よし蛇の衣きぬとも変らば化なれ、熱いと云つても月は抱いだく。

三造は重い廂ひさしの下に入つて、背に盤ばん石じゃくを負いながら、やつと婦おんなの肩際しやがに蹲またんだのである。

耳許みみかたはずれに密そと覗のぞく。俯うつむ向けのその顔斜そめなれば、鼻かと思うのがすつとある、ト手を翳かざしもしなかつたが、鬢びんの毛が、霞のように、何となく、差寄せた我が眉へ触るのは、幽かすかに呼吸いきがありそうである。

「令嬢じょうさん。」

とちよつと低声こごえに呼んだ——爪つまはずれ、帯さの状さま、肩かたの様子、山家やまがの人でないばかりか、髪かみのかざりの当世さ、鬢びんの香さえも新しい。

「嬢さん、嬢さん——」

とやや心易こころやすげに呼よび活いけながら、

「どうなすつたんですか。」

とその肩に手を置いたが、花弁はなびらに触ふるに齊ひとしい。

三造は四辺あたりを見て、つツと立つて、門口かどぐちから、真暗まっくらな家やの内へ、

「御免。」

「ほう……」

と響いたので、はつと思うと、ううと鳴つて訝と知れた。自分の声が高かった。

「誰も居ないな。」

美女の姿は、依然として足許に横わる。無慚や、片類は土に着き、黒髪が敷居にかかつて、上ぎまに結目高う根が弛んで、簪の何か小さな花が、やがて美しい虫になつて飛びそうな。

しかし、煙にもならぬ人を見るにつけて、——あの坂の途中に、可厭な婆と二人居て手を掉つたことを思うと、ほとんど世を隔てた感がある。同時に、渠等怪しき輩が、ここにかかる犠牲のあるを知らせまいとして、我を拒んだと合点さるるにつけて、とこう言う内に、追つて来て妨しよう。早く助けずば、と急心に赫となつて、戦く膝を支いて、ぐい、と手を懸ける、とぐつたりした腕が柔かに動いて、脇明を迂つた指尖が胸へかかつた処を、ずツと膝を入れて横抱きに抱き上げると、仰向けに綿を載せた、胸がふつくりと咽喉が白い。カチリと音して、櫛が鬼の面に触つたので……慌てて、かなぐり取つて、見当も附けず、どん、と背後へ投つた。

「山伏め、何を言うう！」

十六

「いや、もう、先方が婦人にもいたせ、男子にもいたせ、人間でさえありますれば、手前は正のもの鬼でござる。——狼が法衣より始末が悪い。世間では人の皮着た畜生と申すが、鬼の面を被つた山伏は、さて早や申訳がない。」

御堂の屋根を蔽い包んだ、杉の樹立の、廂を籠めた影が射す、炉の灰も薄蒼う、茶を煮る火の色の※と冴えて、埃は見えぬが、休息所の古畳。まちなし黒木綿の腰袴で、畏つた膝に、両の腕の毛だらけなのを、ぬい、と突いた、賤しからざる先達が総髪の人品は、山一つあなたへ獅嚙を被つて参りしには、ちと分別が見え過ぎる。

「怪しからぬ山伏め、と貴辺が思いなされたで好都合。その御婦人が手前の異形に驚いて、恍惚となられる。貴辺は貴辺で、手前の野譚言を真実と思召し、そりやこそ鬼よ、触らぬ神に祟りなしの御思案で、またまたお見棄てになつたとします、御婦人がそれなりで御覧じろ、手前は立派な人殺でございます。何も、げし人に立派は要らぬが、承りましただけでも、冷汗になりますで。」

いや、それにつけても、」

と山伏の肩が聳え、

「物事と申すは、よく分別をすべきであります。私も身柄、鬼神を信ぜぬと云うもいかがですが、軽忽かるはずみに天窓あたまから怪くあやしして、さる御令嬢ひきがえるを、臺、土蜘蛛へんげの变化同然に心得ましたのは、俗にそれ……棕櫚しゅろぼうき箒が鬼、にも増まつた狼狽うろうたえ方、何とも恥入のつて退けました。——（山伏め、何を吐ぬかす。）——結構でござるとも。その御婦人をお救けなさつて、手前もお庇かげで助かりました。

いかにも、不意に貴辺あなたにお出逢い申したに就いて、体の可ていい怪談をいたし、その実、手前、峠において、異変なる扮装いでたちして、昼強盗、追落おいおとしはまだな事、御婦人に対し、あるまじき無法不礼を働いたように思召したも至極の至りで。」

「まあ、お先達、貴下あなた、」

対向さしむかいの三造は、脚絆きやはんを解いた瘦脛やせすねの、疲切つかれきった風していたのが、この時遮る。

……

「いやいや、仰せではありませんが、早い話が、これが手前なら、やっぱり貴辺をそう存ずる、……道でござる、理でございます。」

しかし笑つて遣わされ。まず山中毒^{やまあたり}とでも申すか、五里霧中とやらに徘徊^{さまよ}いました手前、真人間から見ますると狂人の沙汰ですが、思いの外時刻が早く、汽車で時の間^まに立帰りましたのを、何か神通で、雲に乗つて馳^はせ戻つたほどの意気組。その勢^{いきおい}でな、いらだか、苛^{いら}つて、揉^{もみ}上げ、押^{おし}摺^すり、貴辺が御無事に下山のほどを、先刻この森の中へ、夢のようにお立出^{たちい}でになつた御姿を見まするまで、明王の靈前^{いのり}に祈を上げておりました。

それもつて、貴辺が、必定、お立寄り下さると信じましたからで。

信じながらも、思い懸けぬ山路^{やまみち}に一人憩^{やす}んでござつた、あの御様子を考えると、どうやら、遠い国で、昔々お目に懸^かつたような、茫^{ぼう}とした気がしまして、眼前^{めのまえ}に焚^たきました護摩^{ごま}の果^はが霧になつて森へ染み、森へ染み、峠^{かた}の方^{かた}を蔽^{おほ}い隠すようにもござつた。……

何にせよ、私^{てまえ}どうかしていたと見えます。兎はちよいちよい、猿も時々は見懸けますが、狐狸は気もつきませぬに、穴の中からでも魅^やりましたかな。

明王もさぞ呆れ返つて、苦笑いなされたに相違^{ちが}ござらん。私^{てまえ}のその痴^{たわ}けさ加減、——あ、御無事を祈るに、お年紀^{とし}も分らぬ、貴辺の苗字だけでも窺^{うかが}つておこうものを、——心着かぬことをした。」

総髪をうしろへ撫でる。

「などと早や……」

三造は片手をちやんと炉縁ろぶちに支ついて、
「ありがと難有う存じます。御厚意、何とも。」

十七

あらた更めて、

「お先達、そうやって貴下あなたは、御自分お心得違いのようにはかりお言いですが、——その人を抱き起して美しい顔を見た時、貴下に対して心得違いしましたのは、私の方じゃありませんか。」

そして、無事、」

と言ひ懸けたが、寂しい顔をした、——実は、余り無事でばかりもなかったのであるから。

「ともかくも……峠を抜けられましたのは、貴下が御祈念の功德かも知れません——たしか確に功德です。」

そうでない、今頃どうなっていたか自分で自分が解らんです。何ともお礼の申上げようはありません。実際。

その人だつて、またそうです——あの可^{おそろし}恐い面のために気絶をした。私が行かないとそのまま一命が終つたかも知れない、と言えば、貴下に取つて面倒になりますけれども、ただ夢のように思つたと、彼方^{あちら}で言います——それなり茫となつて、まあ、すやすやと寐^ね入つたも同じ事で。たとい門口に倒れていたつて、茎^{じく}が枯れたというんじやなし、姿の萎^{しぼ}んだだけなんです……露が降りれば、ひとりでにまた、恍^{うっとり}惚と咲いて覚める、……殊に不思議な花なんですもの。自然の露がその唇に点滴^{したた}らなければ点滴らないで、その襟の崩れから、ほんのり花^{はなびら}弁が白んだような、その人自身の乳房から、冷い甘いのを吸い上げて、人手は藉^からないでも、活^{いきかえ}返るに疑いない。

私は——膝へ、こう抱き起して、その顔を見た咄^{とつさ}嗟にも、直ぐにそう考えました。——こりや余計な事をしたか。自分がこの人を介抱しようとするのは、眠つた花を、さあ、咲け、と人間の呼吸^{いき}を吹掛けるも同一^{おんなじ}だと。……

で、懐^{ふとこころ}中の宝丹でも出するか、じたばた水でも探してからなら、まだしもな処を、その帯腰^{すそ}から裾^{すそ}が、私に起こされて、柔かに揺れたと思うと、もう睫毛^{まつげ}が震えて来た。糸のよ

うに目を開いたんですから、しまった！ となお思っただんです——まるで、夕顔の封じ目を、不作法に指で解いたように。

はッとしながら、玉を抱いた逆上せ加減で、おお、山蟻が這ってるぞ、と真白な咽喉の下を手で払くと、何と、小さな黒子があっただんでしょう。

逆に温かな血の通うのが、指の尖へヒヤリとして、手がぶるぶるとなった、が、引込める間もあります。婦がその私の手首を、こう取ると……無意識のようじゃありませんが、下の襟を片手で取って、ぐいと胸さがりに脇へ引いて、掻合わせたので、災難にも、私の手は、馥郁とももの薫る、襟裏へ縫留められた。

さあ、言わないことか、花弁の中へ迷込んで、虻め、蛭いても拔出されぬ。

困窮と云いますものは、……

黙っちゃいられませんから、

(御免なさいよ。)

と、のつけから恐入った。——その場の成行きだったんですな。——

「いかにも、」

と先達は、膝に両手を重ねながら、目を据えるまで聞入るのである。

「黙っています。が、こう、水の底へ澄切ったという目を開いて、じつと膝を枕に、腕かひなに後毛おくれげを掛けたまま私を見詰める。眉が浮くように少し仰向あおむいた形で、……抜けかかった櫛くしも落さず、動きもしません。

黙つちやいられませんから、

（気がついたのでしたか。失礼を、）

まだ詫わびをする工合ぐあいの悪さ。でも、やっぱり黙っています。

（気分はどうなんです。ここに倒れていなすつたんだが。）

これで分つたろう、放したまえ、早く擦抜けようと、もじつのが、婦おんなの背せなを突ついて揺ゆすぶるようだから、慌あわててまた窘すくまりましたよ。どこを糸で結んで手足になつたか、女の身体からだがまるで綿わたで……」

十八

「綿わたで……重いことは膝が折れそう——もつともこの重いのは、あの昔話あやしの、怪あやしい者ものが負おぶさると途中で挫ひしげるほどに目貫めかたがかかるっていう、そんなのじゃない。そりや私にも分つ

ていましたが、……

ああ、これはなぜ私が介抱したか、その人はどうしていたか、そんな事なんぞ言ってるんではまだるっこい。

（失礼しました、今何です、貴女の胸に蟻が這っていたもんですから、）

つい払って上げよう、と触ったんだ、とてつきりそれがために、そんな様子で居るんだろう、と気が着いて、言訳をしましたがね。

黙っています……ちつとも動かないで、私の顔を、そのまま見詰めてるじゃありませんか。」

と三造は先達の顔をみまも瞻つて、

「じゃ、まだ気が遠くなつたままで、何も聞えんのかと思えば、……顔よりは、私が何か言うその声の方が、かえつてその人の瞳に映るような様子でしょう。梔くちなし子の花でないのは、一目見てもはじめから分つてます。

弱りました。汗が冷く、ぞっ慄気と寒い。息がはず発奮んで、身内が震う処から、取つたのを放してくれない指の先へ、ぱつと火がついたように、卜胸へ来たのは、やあ！こうやって生血を吸い取る……」

「成程、成程、いずれその辺で、大概気絶（ひきつ）けてしまうのでござろう。」

と先達は合点（がってん）する。

「転倒（てんどう）しても気は確（たしか）で、そんなら、振切つても芻（はねあ）上つたかと言え、またそうもし得ない、ここへ、」

境は帯（おび）を圧（おさ）えつつ、

「天女の顔の刺繡（ほりもの）して、自分の腰から下はさながら羽衣の裾になつてゐる姿でしょう。退（の）きも引きもありません。いや、ならんのじゃない、し得なかつたんです——お先達、」

と何か急（せ）きながら言淀（いよいよ）んで、

「話（わ）に聞いた人面瘡（じんめんそう）——その瘡（かさ）の顔が窈窕（ようちよう）としてゐるので、接吻（キッス）を……何（なに）です、その花の唇（くちびる）を吸（す）おうとした馬鹿（ばか）ものがあつたとお思（おもう）いなさい。」

と云（い）うと、先達は落着（おち）いた面色（おももち）で、

「人面瘡（じんめんそう）、ははあ、」

さも知己（ちかづき）のような言（い）ひぶり、

「はあ、人面瘡（じんめんそう）、成程（なほ）、その面（つら）が天人（てんじん）のように美しい。芙蓉（ふよう）の眦（まなじり）、丹花（たんか）の唇（くちびる）——でござつたかな、……といたして見（み）ると……お待（まち）ちなさい、愛（あい）着（じやく）の念（ねん）が起（お）つて、花（はな）の唇（くちびる）を……」

ふん、

と仰向あおむいて目を瞑ねむったが、半眼になつて、傾きざまに膝を密そと打ち、

「津しんしん々として玉としたたる甘露の液と思ふのが、実は膿うみ汁しるといたした処で、病人の迷うのを、強あながち白痴たわけとは申されん、——むむ、さようなお心持でありましたか。」

真顔で言われると、恥じたる色して、

「いいえ、心持と言うよりも、美人を膝に抱いだいたなり、次第々々に化石でもしそうな、身動きのならんその形がそうだったんです。……

段々孤家ひとつやの軒が暗くなつて、鉄板で張つたような廂ひさしが、上から圧伏おつぷせるかと思われます……そのまま地獄の底へ落ちて行くかと、心も消きえ々きえとなりながら、ああ、して見ると、坂下で手を掉ふつた気高い女にょしやう性は、我らがための仏であつた。——

この難を知つて、留められたを、推して上つたはまだしも、ここに魔物の倒れたのを見た時、これをその犠いけにえ牲せいなどと言う不心得。

と俯向うつむいて、熟じつと目を睡ねむると……歴々まごまごと、坂下に居たその婦おんなの姿、——羅うすものの衣紋えもんの正しい、水の垂れそうな円鬚まるまげに、櫛めのてらてらとあるのが目め前まえへ。——

驚いた、が、消えませんが。いつの間にか暮れかかる、海の風なぎたような緑の草の上へ、

渚なぎさの浪なみのすらすらとある靄もやを、爪つまさきの白う見ゆるまで、浅く踏んで、どうです、ついそこへ来て、それが私の目の前に立つてるじやありませんか。私を救うためか。

と思うと、どうして、これも敵方の女將軍じよしょうぐん。」

「女將軍？ええ、山賊の巢窟そうくつかな。」

と山伏はきよとんとする。

十九

「後で聞きますと、それが山へ来る約束の日だったので、私の膝に居る女が、心待こころまちに古家ふるいえの門かどぐち口まで出た処へ、貴下あなたが、例の異形で御通行になったのだそうです。

その円鬚まげに結った姉あねの方は、竹の橋から上ったのだと言いました。つい一条路ひとすじみちの、あの上りを、時刻も大抵同じくらい、貴下は途中でお逢いになりはしませんでしたか。」

先達は怪訝けげんな顔して、

「されば、……とところで、その婆さんはどうしましたな、坂下に立ったのを御覧になった時は、傍そばについていたというお話続きの、」

とかえつてたずねる。

「それは峠までは来ませんでした。風呂敷包みがあったので、途中見懸けたのを、頼んで、そこまで持たして来たのだそうで。……やっぱりその婆さんは、路傍みちばたに二人で立っていた一人らしく思われます。その居た処は、貴下にお目にかかりました、あの縄張をした処、……」

「さよう。」

「あすこよりは、ずっと麓ふもとの方です。」

「すると、そのどちらかは分りませんが、貴辺あなたに分れて下山の途中で、婆さん一人にだけは逢いました。成程——承れば、何か手に包んだものを持っていた様子で——大方その従と伴もをして登った方でありましような。」

それにしては、お話しはその円鬚まげに結いった婦人に、一条路ひとすじみち出会わねばならん筈はず、……何か、崖の裏、立樹の蔭へでも姿を隠しましたかな。いずれそれ人目を忍ぶという条すじで、「きつとそうでしょう。金沢から汽車で来たんだそうですから。」

先達は目を睜みはつて、

「金沢から、」

「ですから汽車へいらつしやる、貴下と逢違う筈はありません。」

「旅をかけて働きますかな。」

「ええ、」

「いや、盗賊どろぼうも便利になった。汽車に乗って横行じや。俱利伽羅峠に立籠たてこもつて——御時節けがら怪けしからん……いずれその風呂敷包ふしも、たんまりいたした金目のものでございましょうで。」

黙つた三造は、しばらくして、

「お先達。」

「はい、」

と澄ました風で居る。

「風呂敷の中は、綺麗な蒔絵まきえの重箱でしたよ。」

「どこのか、什物じゅうもつ、」

「いいえ、その婦人ひとの台所の。」

「はてな、」

「中に入ったのは鮎あゆの鮎すしでした。」

「鮎の鮎とは、」

「莊河の名産ですって、」

先達は唾然として、

「どうもならん。こりや眉毛に唾じや。貴辺も一ツ穴の貉ではないか。怪物かと思えば美人で、人面瘡で天人じや、地獄、極楽、円鬚で、山賊か、と思えば重箱。……宝物が鮎の鮎で、莊河の名物となつた。……待たつせえ、腰を円くそう坐られた体。裁も、森の中だけ狸に見える。何と、この囲炉裏の灰に、手形を一つお庄しなさい、ちよぼりと落雁の形でござろう。」

「怪しからん、」

と笑つて、気競つて、

「誰も山賊の棲家だとも、万引の隠場所だとも言わないのに、貴下が間違えたんではありませんか。ええ、お先達？」

「はい、」

と言つて、瞬きして、たちまち呵々と笑出した。

「はッはッはッ、慌てました、いや、大狼狽。またしても獅噛を行つたて。すべて、こ

の心得じやに因つて、鬼の面を被ります。

時にお茶が沸きました。——したが鮎の鮎とは好もしい、貴下も御賞翫なされたかな。
」。

二十

「承つた処では、麓ふもとからその重詰を土産に持つて、右の婦人が登山されたものと見えますな——但しどうやら、貴辺あなたがその鮎あがを召ると、南蛮秘法なんばんの痺しびれぐすり薬で、たちまち前後不覚、といったような気がしてなりません。早く伺いたい。鮎はいかがで？」

その時境は煎茶せんちやに心を静めていた。

「御馳走ごちそうは……しかも、ああ、何とか云う、ちよつと屠蘇とその香のする青い色の酒に添えて——その時は、笥かけひの水に埃ほこりも流して、袖の長い、振ふりの開いた、柔かな浴衣に着換えなどして、舌鼓を打ちましたよ。」

「いずれお酌で、いや、承つても、はつと酔う。」

と日に焼けた額を押撫おしなでながら、山伏は破顔する。

「しかし、その倒れていた婦人ですが、」

「はあ、それがお酌を参ったか。」

「いいえ、世話をしてくれましたのは、年上の方ですよ。その倒れていた女は——です。ね。」

「そうそうそう、またこれは面被りじや。どうもならん、我ながら慌てて不可ん。成程、それはまだ一言も口を利かずに、貴辺の膝に抱かれていたて。何をこう先走るぞ。が、お話の不思議さ、気が気でないで急立ちますよ、貴辺は余り落着いておいでなさる。」

「けれども、私だって、まるで夢を見たようなんですから、霧の中を探るように、こう前後を辿り辿りしないと、茫として掴えられなくなるんですよ。……お話もお話だが、御相談なんですから、よくお考えなすつて下さい。」

——その円鬚の、盛装した、貴婦人という姿のが、さあ、私たちの前へ立ったでしよう。——

膝を枕にしたのが、倒れながら、それを見た……と思つて下さい。手を放すと、そのまま、半分背を起した。——両膝を細りと内端に屈めながら、忘れてらしく投げた裾を、すつと搔込んで、草へ横坐りになると、今までの様子とは、がらり

と変つて、活々した、清い調子で、

(姉さん、この方を留めて下さい、帰しちや厭よ。)

と言うが疾いか、すつと、戸口の土間へ、青い影がちらちらして、奥深く消え込んだ。

私は呆氣に取られた。

すると、姉さんと言われた、その貴婦人が、緊つた口許で、黙つて、ただちよいと会釈をする、……これが貴下、その意味は分らぬけれども、峠の方へ行くな、と言つて……
 ……手で教えた婦人でしょう。

何にも言わないだけなお氣がさす。

(ええ、実は……)

と前刻からの様子を饒舌つて、ついにて疑を解こうとしたが、不可ません。

(ああ、)

それ覗くまでもなく、立つたままで、……今暗がりへ入った、も一人の後を軒下にこう透しながら、

(しばらくどうぞ。)

坂を上つて、アノ薄原を潜るのに、見得もなく引提げていた、——重箱の——その

紫包を白い手で、羅の袖へ抱え直して、片手を半開きの扉へかける、と嚴重に出来たの、何の。大巖の一枚戸のような奴がまた恐しく迂りが良くなって、発奮みかかって、がらんからから山鳴り震動、カーンと笈を返すんです。ぎよつとしました。

その時です。

(どこへもいらしつちや不可ませんよ。)

と振返りざまに莞爾、美しいだけにその凄さと云ったら。高い敷居に棲も翻さず、裾が浮いて、これもするりと、あとは御存じの、あの奥深い、裏口まで行抜けの、一条の長い土間が、門形角形に、縦に真暗な穴で。」

と言った、この辺家の構は、件の長い土間に添うて、一側に座敷を並べ、鍵の手に鍵屋の店が一昔以前あった、片側はざらりと板戸で、外は直ちに千仞の俱利伽羅谷、九十九谷の一ツに臨んで、雪の備え嚴重に、土の廊下が通うのである。

二十一

「今の一言に釘を刺されて、私は遁ることも出来なくなつた、……もつとも駆出すにした

処で、差当りそこいら雲を踏む心持、馬場も草もふわふわらしいに、足もぐらぐらとなつていて、他愛がありません。止むことを得ず、暮れかかる峰の、莫大な母衣を背負つて、深い穴の気がする、その土間の奥を覗いていました。……冷こい大戸の端へ手を掛けて、目ばかり出して……

その時分には、当人大童で、帽子も持物も転げ出して草隠れ、で足許が暗くなった。遥か突当り——崖を左へ避けた離れ座敷、確か一宇別になって根太の高いのがあります、……その障子が、薄い色硝子を嵌めたように、ぼうとこう鶏卵色になった、灯を点けたものらしい。

その障子で、姿を仕切つて、高縁から腰を下して、裾を踏落した……と思う態度で、手を伸して、私においでおいでをする。それが、白いのだけちらちらする、する度に、
(ええ、ええ。)

と自分で言うのが、口へ出ないで、胸へばかり込上げる——その胸を一寸ずつ戸擦れに土間へ向けて斜違いに糺出しますがね、どうして、掴まった手は、段々堅く板戸へ喰入るばかりになって、挺でも足が動きません。

またちらりと招く。

招かれても入れないから、そうやって招くのを見るのが、心苦しくなつて来たので、顔を引込ひっこまして、門かどへ身体からだを横づけに、腕組うでぐみをして棒立ち——で、熟じつと目を睡ねむつて俯向うつむいていました。

この体ていが、稀代きだいに人間というものは、激しい中にも、のんきな事を思います。同じ何なにでも、これが、もし麓ふもとだと、頬ほお被かぶりをして、礫つぶてをトンと合図あひびをする、カタカタと……忍しのび足の飛石あしづたいで……

(いらつしやいな。)

と不意ふいきに鼻はなの前まへで声こゑがしました。いや、その、もの越この婀娜あだに碎けたのよりか、こつちは腰こしを抜かないばかり。

(はッあ。)

と言う。

(さあ、どうぞ。)

と何にも思わない調子でしたが、板戸くぎりを劃くに、横顔よこがほで、こう言う時、ぐつと引入れるようにその瞳ひとみが動いたんです。「

「これは、どちらの御婦人おんなで、」

と先達は、湯を注しかけた土瓶を置く。

「それを見分けるほど、その場合落着いてはいられませんでした。

敷居を跨ぐ時、一つ躓いて、とつぱぐつたじき傍に、婦人が立ってたので、土間は広くつても袖が擦れて、

(これは。)

と云うと……………

(お危うございます、お気をつけ下さいまし。)

(どうもつい馴れませんので、)

と言いましたかね、考えると変な挨拶。誰がこんな処を歩行馴れた奴がありますか。

……外から見える縁側の雨戸らしいのは、これなんでしょう、ずつと裏庭へ出抜けるまで、心こころづも積り十八九枚、……さよう二十枚の上もありましたろうか、中ほどが一ヶ所、開いて

いました。——そこから土間が広くなる、左側が縁で、座敷の方へ折曲おれまがつて、続いて、

三ツばかり横に小座敷が並んでいます。心覚えが、その折曲おれまがの処まで、店口から掛けて、

以前、上下の草鞋わらじば穿きが休んだ処で、それから先は車を下りた上客が、毛氈もうせんの上へあがつた場処です。

余計なことを言うようですが、後の都合がありますから、この屋造の様子を聞いて下さい。

で座敷々々には、ずらり板縁が続いているのが薄明りで見えました。それは戸外からも見える……崖へ向けて、雨戸を開けた処があつたからです。

が、ちようど土間の広くなつた処で、同じ事ならもつと手前を開けておいてくれれば可い……入はいりくち口くちしばらくの間、おまけに狭い処が、隧トンネル道みちでしょう。……処へ、おどついでるから、ばたばたとそこらへ当る。——黙つて手を曳ひいたではありませんか。」

二十二

「対手あいては悠々としたもので、

(蜘蛛の巣が酷ひどいのでございますよ。)

か何かで、時々歩ある行きながら、扇子……らしい、風を切つてひらりとするのが、怪しい鳥の羽搏はうつ塩梅あんばい。

これで当りはつきました。手を曳ひいてるのは貴婦人の方らしい、わざわざ扇子を持参で

迎いにしようとは思われませんか。

果して、そうでした。雨戸の開けてある、広土間の処で、円鬚が古い柱の艶に映った。外は八重葎で、ずつと崖です。崖にはむらむらと靄が立って、廂合から星が、……いや、目の光り、敷居の上へ頬杖を支いて、墓が覗いていそう。婦人がまた蒼黄色になりはしないか、と密と横目で見ましたがね。襲を透いた空色の紹の色ばかり、すつきりして、黄昏の羅はさながら幻。そう云う自分はと云うと、まるで裾から煙のようです。途端に横手の縁を、すつと通つた人氣勢がある。ああ、白脛が、と目に映る、ともう暗い処へ入つた。

向うの、離座敷の障子の棧が、ぼんやりと風のない燈火に描かれる。——そこへ行く背戸は、浅茅生で、はらはらと足の甲へ露が落ちた。

(さあ、こちらへ。)

ここで手を離して、沓脱の石に熊笹の生え被つた傍へ、自分を開いて教えました。障子は両方へ開けてあつた。この沓脱を踏みながら、小手招をしたのでしよう。

(上りましても差支えはございませんか。)

とその期に及んで、まだ煮切らない事を私が言つと、

(主人^{あるじ}がお宿をいたします。お宅同様、どうぞお寛^{くつろ}ぎ下さいまし。)

と先へ廻^{めぐ}つて、こう覗^{のぞ}き込むようにして褥^{しとね}を直した。四畳半で、腰を曲げて乗出すと、縁越に手が届くんですね。

(ともかく御免を、)

高縁へ腰を蹂^{にじ}つて、爪尖^{つまさきさ}下りに草鞋^{わらじ}の足を、左の膝へ凭^{もた}せ掛けると、目敏^{めざと}く貴婦人が
気を着けて、

(ああ、お濯^{すす}ぎ遊ばしましょうね。)

と二坪ばかりの浅茅生を斜^{はす}に切つて、土間口をこつちから、

(お綾^{あや}さん——)

と呼びます。

(ああ、もしもし。)

私は草鞋を解きながら、

(乾いた道で、この足袋がございます。よく払^{はた}けば、何、汚れはしません。お手数^{てかず}は恐れ
入ります、どうぞ御無用に……しかしお座敷へ上りますのに、)

と心着くと、無雑作で、

(いいえ、もう御覽の通り、土間も同一おんなじでございますもの、そんな事なぞ、ちつともお厭いといには及びませんの。)

と云いかけて莞爾にっこりして、

(まあ、土間も同一だつて、お綾さんが聞いたら何ほでも怒るでしょう。……人様のお住す居まを、失礼な。これでもね、大事なお客様に、と云つて自分の部屋を明渡したんでござい
ますよ。)

いかにも、この別亭はなれが住居すまいらしい。どこを見ても空屋同然な中に、ここばかりは障子にも破れが見えず、門口に居た時も、戸を繰り開ける音も響かなかつた。

そこで、ちと低声こごえになつて、

(貴女あなたは……此家ここの……ではおあんなさいませぬのですか。)

(は、私もお客ですよ。——不行届きでございますから、事に因りますと、お合宿あいやどを願ねがうかも知れませんが、御迷惑でござんしようね。)

とちよいと煽あおいだ、女扇子おんなおうちに口許くちもとを隠したものです。」

「成程、どうも。」

山伏ひげは髯ひげだらけな頬を撫でる。

「私は、黙つて懐中ふところを探しました。さあ、慌てたのは、手拭てぬぐい、蝦蟇口がまぐち、皆無みんない。さまでも思わなかつたに、余程顛動てんどうしたらしい。門かどへ振落して来たでしょう。事ここに及んで、旅費などを論ずる場合か、それは覚悟しましたが、差当り困つたのは、お約束の足をはた払く……」

二十三

「……様子で手拭が無いと見ると、スツと畳んで、扇を胸高な帯に挟んで、袂たもとを引いたが長襦袢ながじゆばんの端と一所に、涼しい手巾ハンケチを出したんですがね。

崖おぼろへ向いた後姿、すぐに浅茅生あさぢろうへ帯腰を細く曲げたと思うと、さらさらと水が聞えた。

——朧おぼろの清水と云うんですか、草がくれで気が着かなかつた、……むしろそれより、この貴婦人に神通があつて、露を集めた小流こながれらしい。

(これで、貴下あなた、)

と渡す——算かけひがそこにあるのであつたら、手数てかずは掛けないでも洗つたものを、と思いなだんまがら思つたように口へは出ないで、黙だんまりで、恐入おそつたんですが、柔やわらかく絹からが擲なんで、水色に

足の透いた処は、玉を踏んで洗うようで。

(さあ、お寄越しなさいまし。)

と美しい濡れた手を出す。

(ちよいと濯そそぎましょう。)

遮ると、叱るように、

(何ですね、跣足はだしでお出なすつては、また汚れるではありませんか。)

で恐縮なのは、そのままの手を拭ふいて、

(後で洗いますよ。)と丸まるげて落した。手巾ハンケチは草の中。何の、後で洗うまでには、蛇が

来て抱くか、山やま、おとこが接吻キッスをしよう、とそこいらをみまわりましたが、おっかなびつくり。

(姉さん。)

(ああ、)

(ちよいと。……)

土間口の優しい声が、貴婦人を暗がりへ呼込んだ。が、二ツ三ツ何か言交わすと、両手に白いものを載のせて出た——浴衣でした。

余り人間離れがしますから、浅葱あさぎの麻の葉絞りで絹縮きぬちぢみらしい扱帯しぎは、平ひらにあやまり

ましたが、寝衣ねまきに着換えろ、とあるから、思切つて素裸すだかになつて引掛けたんです。女
もので袖が長い——洗つたばかりだからとは言われたが、どこかヒヤヒヤと頸えりもと二元にげんから身
に染む白粉おしろいの、時めく匂においで。

またぼうとなつて、居心いごころが据すわらず、四畳半を燈火ともしびの前まえ後うしろ、障子に凭より懸かかると、透間
からふつと蛇の臭においが来こそううで、驚おどいて摺すつて出る。壁際くつに附つ着くけば、上かみから蜘蛛くもがすつと
下したりそううで、天窓あたまを窺すくめて、ぐるりと居直まる……真中まんなかに据すえた座蒲団ざぶたんの友染ゆうぜん模様もようが、
桔梗ききよう梗えいがあつて薄すすきがすらすら、地ちが萌黄もえぎの薄すすきい処ところ、戸外おもての猿ケ馬場さるけばそつくりといふのを、
ずつと避さけて、ぐるぐる廻まりは、早はやや我われながら独ひとりりでぐでんに酔よつたよううで、座敷ざしきが揺ゆれ
る、障子しょうじが動うく、目めが廻まる。ぐたりと手てを支たく、や、またぐたりと手てを支たく。

これじゃならん、と居坐いすま居まを直ただして、キチンとすると、搔合かきあわせる浴衣ゆいを……潜くぐつて触ふ
る自分の身体からだが、何なにとなく、するりと女にょしやう性せいのよううで、ぶるツとして、つい、と腕うでを出だ
して、つくづくと視みめる始はじ朱しゆ。さ、こうなると、愚おろにもつかぬ、この長い袖そでの底そこには、針はり
のよううを褐かほいろ色の毛けがうじやうじや……で、背中せちゆうからむずつきはじめる。

もつとも、今浴衣ゆいを持もつて来こて、

(私わたしもちよいと失礼しつれいをいたしますよ。)

で、貴婦人は母屋へ入った——当分離座敷に一人の段取で。

その内に、床の間へ目が着きますとね、掛地がない。掛地なしで、柱の掛花活に、燈火には黒く見えた、鬼薊が投込んである。怪しからん好みでしょう、……がそれはまだ可い。傍の袋戸棚と板床の隅に附着けて、桐の中古の本箱が三箇、どれも揃って、彼方向きに、蓋の方をぴたりと壁に押着けたんです。……」

「はあ、」

とばかりで、山伏は膝の上で手を拵げた。

「昔修行者が、こんな孤家に、行暮れて、宿を借ると、承塵にかけた、槍一筋で、主人の由緒が分ろうという処。本箱は、やや意を強うするに足ると思うと、その彼方向きの不開の蓋で、またしても眉を顰めずにはいられませんのに、押並べて小机があった。は可懐しいが、どうです——その机の上に、いつの間に据えたか、私のその、蝦蟇口と手拭が、ちゃんと揃えて載せてあるのではありませんか、お先達。」

と境は居直る。

「背後は峰で、横は谷です。峰も、胴の窪んだ、頭がざんばらの栗の林で蔽い被さつていようというんで、それこそ猿が宙返りでもしなければ上れそうにもなし、一方口はその長土間でしよう、——今更遁出そうツたつて隙があるんじゃないやなし、また遁げようと思つたのでもないが、さあ、静としていられないから、手近の障子をがたりと勢よく開けました。……何か命令をされたようで、自分気儘には、戸一枚も勝手を遣つては相成らんような気がしていたのでありますけれども……」

すると貴下、何とその横縁に、これもまた吃驚だ。私のいかなる麦藁帽から、洋傘、小さな手荷物ね。」

「やあやあ、」

「それに、貴下が打棄つておいでなすつたと聞きました、その金剛杖まで、一揃、驚いたものの目には、何か面当らしく飾りつけたもののように置いてある。……」

山伏ぐんなりして、

「いやもう、凡慮の及ぶ処でござらん。黙つて承りましよう、そこで？」

「処へ、母屋から登音が響いて来て、浅茅生を颯々、沓脚で、カタリと留むと、所

在紛らし、谷の上の靄を視めて縁に立った、私の直ぐ背後で、衣摺れが、はらりとする。
 小さな咳して、

(今に月が出ますと、ちつとは眺望になりますよ。)

と声を掛けます。はて違うぞ、と上から覗くように振向く。下に居て、そこへ、茶盆を直した処、俯向いた襟足が、すつきりと、髪濃いのに、青貝摺の櫛が晃めく、鬢も撫つけたらしいが、まだ、はらはらする、帯はお太鼓にきちんと極まった、小取廻しの姿の好き。よろけ縞の明石を透いて、肩から背がふつくりと白かった——若い方の婦人なんです。

お馴染の貴婦人だとばかり、不意を喰つて、

(いらつしやい。)

と調子を外ずして、馬鹿な言を、と思つたが、仕方なしに笑いました。で、照隠しに勢よく煙草盆の前へ坐る……

(お邪魔に出ましてごさいます。)

莞爾して顔を上げた、そのぱつちりしたのをやや細く、瞼をほんのりさして、片手ついたなりに顔を上げた美しさには、何にもかも忘れしました。

(とんでもない。)

と突つんのめるように巻煙草を火入ひいれに入れたが、トツチていて吸いつきますまい。

(お火が消えましたかしら。)

とちよつと翳かげした、火入れは欠けて燻くすぶつたのに、自然木じねんぼくを抉くりぬき抜の煙草盆。なかな
ずく灰はいふき吹の目覚しきは、……およそ六貫目掛がけたけのこの筍へりほどあつて、縁へりの刻々さきさになつた代物、
先代の茶店が戸棚の隅に置忘れたものらしい。

何の、火は赤々とあつて、白魚しろおに花が散りそうでした。

やつと煙けむのような煙けむりを吸つたが、どうやら吐掛けけそうけで恐縮おそ縮で、開けた障子の方へ吹出
したもんです。その煙がふつと飛んで、裏の峰から一ひと風おろし颯さつと吹込む。

と胸をずらして、燈あかりを片隅に押ししましたが、灯が映るか、目のふちの紅くれないは薄らぐぬ。で、
すつと吸うように肩を細めて、

(おお、涼しい。お月様の音ですかね、月の出には颯さつといつてきつと峰から吹きますよ。

あれ、御覧なさいまし。)

と燈あかりを背せに、縁へりの端へ仰向あおむいた顔で恍うっとり惚する。

(栗の林へ鵲かさぎぎの橋が懸かかりました。お月様はあれを渡つて出なさいます。いまに峰を離れま

すとね、谷の雲が晃々きらきらと、銀のような波になって、兎の飛ぶのが見えますよ。）

（ほとんど仙境せんきやう。）

と私は手を支ついて摺ずって出ました。

（まるで、人間界を離れていますね。）

……お先達、私のこ言つたのはどうです。」

急に問われて、山伏は、

「ははあ、」

と言う。

二十五

「驚駭おどろきに馴なれて、いくらか度胸も出来たと見え、内々ふつ諷する心持もあつたんですね。

直ぐには答えないで、手捌てきばきよく茶を注ついで、

（粗こいんですよ。）

と言う、自分の湯呑ゆのみで、いかにも客の分といつては茶碗一つ無いらしい。いや、粗いど

ころか冥みよう加か至し極ごく。も一つ唐から草くさの透すかし模も様やうの、硝びい子どろの水吞うづむが俯うつむ向けけに出いて、
（お暑あついんですから、冷水おひやがお宜よろしいかも知しれませせん。それだと直ただきそここに綺い麗れなのが湧わ
いていますけれども、こんな時とき節せつには蛇へびが来きて身からだ体たを冷ひやすと申ましますから。……）
この様子ようすでは飲のみ料もので吐と血けつをししそうにも思おもわれれないから、一息いっに煽あおりました。実じつはげつ
そりと腹はらも空くいて。

それを見みながら今いまの続つきを、……

（ほんとに心細こころこわいんですわ。もう、おつしやいます通り、こんな山やまの中で、幾いく日も何なに日も
ないようですが、確たしかか、あの十三四じゅうさん日の月夜げつやですのね、里さとでは、お盆ぼんでしょう。——そこ
いらの谷やの底そこの方に、どうやら、それらしい燈籠とうろうの灯あかりが、昨夜ゆうが幽すかに見みえましたわ……ほ
つちりよ。）

と蓮葉はすはに云いったが、

（蛭むしくらいに。）

そのまま、わざとでもなく、こう崖たけへかけて俯うつむ向き加減かげんに、雪ゆきの手てを翳かざした時は、言い
うばかりない品しなが備そなわつて、気高きたかい程ほどに見みえました。

（どんなに、可なつか懐かしゆうしゅうごござんざんしたでしょう。）

たちまち悄しおれて涙ぐむように、口許くちごが引しまった。

見ると堪たまらなくなつて、

(そのかわり、また、里から眺めて、自然こうやつてお縁側でも開いていて、フトこの燈と火もしびが見えましたら、どんなにか神こうごう々々しい、天上の御殿のように思われましょう。)

なぜ山住やますまい居いをせらるる、と聞く間もなしに慰めたんです。

あどけなく頭かぶりを振つて、

(いいえ、何の、どこか松こすげの梢えだに消え残りました、寂さみしい高燈籠たかとうろうのように見えますよ。

里のお墓には、お隣りもお向うもありますけれど、ここには私ひとりきり唯一ひとりきり一人。)

小指を反らして、爪つまさき尖とぎを凝じつと見て、

(ほんとに貴あなた下うた、心細い。蓮はすの台うてなに乗のつたつて一人切ひとりぼっちでは寂さみしいんですのに、おまけに

ここは地獄ですもの。)

(地獄。)

と言つて聞返しましたがね、分別もなしに、さてはと思つた。それ、貴あなた下うたの一件です。

「鬼の面、鬼の面。」

と山伏は頭を搔く。

「ところが違います。私もてつきり……だろうと思つて、

(貴女、唐突ですが、昼間変なものの姿を見て、それで、厭な、そんな忌わしい事をおつしやるんじやありませんか、きつとそうでしょう。)

に極めてかかつて、

(御心配はありません。あれは、麓の山伏が……)

ツて、ここで貴下の話をしました。

ついては、ちつと繕つて、まあ、穏かに、里で言う峠の風説——面と向っているんです

から、そう明白にも言えませんでしたが、でも峠を越すものの煩うぐらいの事は言つ

た。で、承つた通り、現にこの間も、これこれと、向う願巻の豪傑が引転かえつたな

ぞは、相手の急所だ、と思つて、饒舌つたには饒舌りましたが、……自若としている。」

「自若として、」

「それは実に澄ましたものです。墓が出て鼬の生血を吸つたと言つても、微笑んでばかり

いるじやありませんか。早く安心がしたくもあるし、こつちは急つて、

(なぜまたこんな処にお一人で。)

と思ひ切つて胸を据えると、莞爾して、

(だって、山蟻やまありの附着くつついた身体からだですもの。)

と肩をぶるぶると震わしてしつかりと抱いた、胸に夕顔の花がまたほのめく。……ああ、魂たまというものは、あんな色か、と婦おんなに玉たまの緒いとを取とつて扱しごかれたように、私がふらふらとした時、

(貴下あなた、)

と顔を上げて、凝じつとまた見ました。」

二十六

「色めいた媚なまめかしき、弱々と優しく、直ぐに男の腕へ入りそうに、怪しい翼を搔かき、窘すくめて誘い込むといった形。情に堪えないで、そのまま抱だきしめようものなら、立たち処どころにぱツと羽搏はばきを打うつ……たちまち蛇うづが寸断すたすたになるんだ。何なにのその術てを食くうものか、とぐつと落着いて張合はつた気で見れば、余りしおらしいのが癩しやくに障さつた。

が、それは自分勝手に、対手さきが色仕掛しけにする……いや、してくれる……と思った、こ
つちが大の自惚うぬぼれ……

もつての外です。

実は、涙をもつて、あわれに、最惜しく、その胸を抱いて様子を見るべき筈で。やがてまた、物凄さ恐しさに、戦き戦き、その膚を見ねばならぬのでした。」――

と語りかけて、なぜか三造は歎息した。

山伏は茶盆を突退けて、釜の此方へ乗つて出て、

「自惚でない。承つた、その様子、怪しからん嬌媚の体じゃ。さようなことをいたいて、少い方の魂を蕩かすわ、ふん、ふふん、」

と頻りに頷きながら、

「そこでその、白い乳房でも露したでござるか。」

「いいえ。」

「いずれ、鳩尾に鱗が三枚……」

黙つて三造は頭を掉る。

「全体蛇体でござるか。」

「いいえ。」

「しからば一面の黒子かな、何にいたせ、その膚を、その場でもつて……」

「見ました、見ましたが、それは寝てからです。」

「寝て……からはなお怪しからん。これは大変。」

と引^{ひつつか}掴んで膝^{いざ}去り出した、煙草入れ押戻しさまに、たじたじとなつて、摺^{ずり}下つて、

「はッはッ、それまで承つては、山伏も恐入る。あのその羅^{うすもの}を透くと聞きましただけでも

美しさが思い遣^やられる。寝てから膚を見たは慄然^{ぞっ}とする……もう目前^{めさき}へちらつく、独^{ひとり}の時

なら鐸^{すず}を振つて怨敵^{おんてきたいさん}退散と念ずる処じや。」

「聞きようが悪い、お先達。私が一ツ部屋にでも臥^{ふせ}つたように、」

「違いますか。」

「飛んだ事を！」

と強く言つた。

「はてな。」

「おんな
婦^{おんな}たちは母屋に寝て、私は浅芽生^{あさぢろう}の背戸を離れた、その座敷に泊つたんです。別々にも、

何にも、まるで長土間が半町あります。」

「またそれで、どうして貴^{あなた}辺は？」

「そうです……お聞^{のぞ}苦しかろうが、覗^{のぞ}いたんです。」

「お覗きなすつた？いずれから。」

「長土間を伝つて行つて、母屋のひとま一室をねや閨にした、その二人の蚊帳を、……

というのが——一人で離座敷に寝たには寝たが、どうしても静しづと枕まくらをしている事が出来なくなつてしまつたんですね。」

「山伏でも寝にくいで、御無理はない、迷いじやな。」

「迷……迷いは迷いでしょうが、色の、恋のこのじやありません。これは言訳でも何でも無い、色恋ならまだしもですが、まつたくは、何とも気味の悪い恐い事が出来たんです。」

「はあ、蚊帳を抱く大入道、夜中に山霧が這はい込こんでも、目をまわすほど怯おびかされる、よくあるやつじや。」

「いや、蚊帳は釣らないでふせ臥ふりました。——母屋の方はそうも行かんが、清水があつて、風通しの可いいせいとか、離座敷には蚊は居ません。で、ちと薄ら寒いくらいだから——つて……敷くのを二枚と小搔こがい巻まき。どれも藍あい縞しまの郡内ぐんない絹ぎぬ、もちろんお綾さん、と言いました、少わかい人の夜のもの……そのかわり蚊帳は差上げません。——

（ちと美しい唇に、分けてお遣んなさいまし。……殿方の血は、殿方ばかりのものじやあ

りませんよ。)

と凄すこいような串じょうだん戯ごを、これは貴婦人の方が言つて。——辞退したが肯きかないで、床の間の傍わきの押入から、私の床を出して敷いたあとを、一人が蚊帳を、一人が絹の四布蒲団よのぶとんを、明石と紹縮緬ろちりめんの裳もすそに搦からめて、蹴けだしづま出ま棲とぎいろの朱鷲色、水色、はらはらと白脛しらはぎも透といて重かさなつて正屋へ隠れた、その後あとの事なんですが。」

二十七

「二人の婦おんなが、その姿で、沓くつぬぎ脱だの笹ささを擦つる棲つまはずれ尋常に、前の浅芽生あさちゆうに出た空には、銀あまのがわ河がわが颯さつと流れて、草が青う浮出しそうな月でしよう——蚊帳釣草かやつりぐさにも、蓼たの葉にも、萌黄もえぎ、藍あい、紅こうあざ麻あざの絹の影が射さして、銀の色紙しろがねしきしに山神さんじんのお花畑を描いたような、そのままそこを閨ねやにしたら、月の光が畳の目、寝姿に白露の刺繡ぬいとりが出来そう、障子をこつちで閉めてからも、しばらく幻が消えません。

が、二人はもう暗い母屋へ入ったんです。と、草清水くさしみずの音がさらさらと聞え出す、それが、抱いた蚊帳と、掛蒲団が、狭い土間を雨戸に触つて、どこまでも、ズツと遠くへ行ゆ

くのが、響くかと思われる。……

ところで、いつでも用あり次第、往通いの出来るようにと、……一体土間のその口にも扉がついている。そこで、それから斜^{はすか}違^{ちが}いに向い合つた沓脱の上の雨戸一枚は、閉めないで、障子ばかり。あとは辻堂のような、ぐるりとある廻^{まわり}縁^{えん}、残らず雨戸が繰つてあつた。

さて、寝る段になつて、そのすつと軽く敷いた床を見ると、まるで、花で織つた羅^{うすもの}のようでもあるし、虹^{にじ}で染めた蜘蛛の巣のようにも見える――

ずかと無遠慮には踏込み兼ねて、誰か内端^{うちわ}に引被^{ひつかつ}いで寝た処を揺起^{ゆりおこ}すといった体裁……

枕許に坐つて、密^{そつ}と搔^{かい}卷^{まき}の襟へ手を懸けると、冷^{つめた}かつた。が、底^{かすか}に幽^{あたたか}味のある気がしてなりません。

また気のせいで、どうやら、こう、すやすやと花が夜露を吸う寝息が聞える。可^{おか}訝^{かし}く、天^{びろ}鷺^{うしど}絨の襟もふつくり高い。

や、開けると、あの顔、――寝乱れた白い胸に、山蟻がぽつちり黒いぞ、と思うと、なぜか、この夜具へ寝るのは、少^{わか}い主^{あるじ}婦^{ふとこ}の懐^{ふところ}中へ入るようで、心^{こころ}咎^{とがめ}がしてならないの

で、しばらく考えていましたがね。

それでもない、またどんな事で、母屋から出て来ないと限らん。誰か見るとこの体は、蓋を壁にした本箱なり、押入なり、秘密の鍵を盗もう、とするらしく思われよう。心苦しうと思つて、思い切つて、搔卷の袖を上げると、キラリと光つたものがある。

鱗、金の、と総毛立つ——と櫛でした。いつ取落したか、青貝摺るので、しかも直ぐ襟許に落ちていました。

待て、女の櫛は、誰も居ない夜具の中に入っていると、すやすやと寢息をするものか、と考えたくらい、もうそれほどの事には驚かず、当然のようだったのも、気がどうかしていたんでしよう。

しばらく手に取つて視ていましたが、

(ええ、縁切だ！)

とちと氣勢つて、ヤケ気味に床の間へ投出すと、カチリという。折れたか、と吃驚して、拾い直して、密と机に乗せた時、いささか、蝦蟆口の、これで復讐が出来たらしく、大に男性の意気を発して、

(どうするものか！)

ぐつと潜つて、

(何でも来い。)

で枕を外して、大の字になつた、……は可いが、踏伸ばした脚を、直ぐに意気地なく、徐々そろそろ縮め掛けたのは……

ぎやつ！

あれは五位ごい鷺さぎでしような。」

「ええ。」

「それとも時ほととぎす鳥すかも知れませんが、ぎやつ！と啼なきます……

可いや厭やな声で。はじめ、一声、二声は、横手の崖に満みちみ充みちた霧もやの底の方に響きました。虚空へ上つて、ぎやつと啼くかと思うと、直ぐにまたぎやつと来る。

ちようど谷底から、一軒家を、環わに飛び廻まわっているようです。幾羽も居るんなら居るで可いが、何だか、その声おんなが、同おんなじ一おんなつ鳥おんなのらしいので、変に心地が悪いのです。……およそ三四十度、声おんなが聞きえたでしようか。

枕まくらもと頭あたまで、ウーンと呻うめ吟いんくのが響ひびき出した、その声おんなが、何とも言いわれぬ……」

「寝てから多時経つ。これは昼間からの気疲れに、自分の魘される声が、自然と耳に入るのじゃないか。

そうも思ったが、しかしやつぱり聞える。聞えるからには、自分でないのは確かでしょう。またどうも呻吟くのが、魘されるのとは様子が違って、苦みくといつた調子だ……さ、その同一苦みくというにも、種々ありますが、訳は分らず、しかもその苦惱が容易じゃない。今にも息を引取るか、なぶり殺しに切刻まれてでもいそうです。」

「やあやあ、どちらの御婦人で。」

「いや、男の声。不思議にも怪しいにも、婦人なら母屋の方に縁はあるが、まさしく男なんですものね。」

「男の声かな、ええ、それは大変。生血を吸われる夥間らしい、南無三、そこで？」

「何しろどこだ知らん。薄気味悪さに、頭を擡げて、熟と聞くと……やつぱり、ウーと呻吟る、それが枕許のその本箱の中らしい。」

「本箱の？」

「一体、向うへ向けたのが気になつたんだが、それにしても本箱の中は可訝い、とよくよく聞き澄しても、間違いでないばかりか、今度は何です、なお困つたのは、その声が一人でない、二人——三人——三個の本箱、どれもこれも唸っている。

ウーウーウーという続けさまのは、厭な内にもまだしも穏かな方で、時々、ヒイツと悲鳴を上げる、キャツと叫ぶ、ダァーと云う。突刺された、斬られた、焼かれた、と、秒を切つて劃のつくだけ、一々ドキリドキリと胸へ来ます。

私はむつくり起直つた。

ああ、硫黄の臭もせず、蒼い火も吹出さず、大釜に湯玉の散るのも聞えはしないが、こんな山には、ともすると地獄谷というのがあつて、阿鼻叫喚が風の繞るごとくに響くと聞く……さては……少い女が先刻——

(ここは地獄ですもの。)

と言つたのも、この悪名所を意味するのか。……キャツと叫ぶ、ヒイと泣く、それ、貫かれた、挟られた……ウ、ウ、ウーンと、引入れられそうに呻吟く。

とても堪らん。

気のせいで、浅茅生を、縁近に湧出る水の月の雫が点滴るか、と快く聞えたのが、ど

くどく脈を切つて、そこらへ血が流れていそうになつた。

さあ、もう本箱の中ばかりじやない、縁の下でも呻吟けば、天井でも呻吟く。縁側でも呻吟り出す——数^{すひやく}百の虫が一^{いつとぎ}斉に離座敷を引包んだようでしょう、……これで、どさりと音でもすると、天井から血みどろの片腕が落ちるか、ひしやげた胸腹が、畳^{あわせめ}の合目から溢出^{はみだ}そう。

幸い前の縁の雨戸一枚、障子ばかりを隔てにして、向うの長土間へ通ずる処——その一方だけは可厭^{いや}な声はまだ憑着^{とりつ}きません。おお！ 事ある時は、それから母屋へ遁^にげよ、という、一^{ひとすじ}条の活路なのかも料^{はか}られん。……

お先達、」

と大息ついて、

「……こう私が考えたには、所説^{いわれ}があります。……それは、お話は前後したが、その何時でした。——先刻^{さつき}、——

(だって、山蟻^{くつつ}の附着^{くつつ}してる身体^{からだ}ですもの。)

で、しつかり魂を抱取られて、私がトボンとした、と……申しましたな。——そこへ、

(お綾さん、これなのかい。)

と声を掛けて、貴婦人が、衝つと入って来たのでした。……片手に、あの、蒔まき絵えものつ包つみを提ひげて、片手にちいさなさ盆ひをとつ。それに台のスツと細い、浅くてぱツと口の開いた、ひどくハイカラな硝子コップ盃プを伏せて、真ま緑みどりで透通る、美しい液体の入った、共口のびん壺びんが添つって、
——三分ぐらい上が透すいていたのでしたつけ。

(ああ、それなの、憚はばりかさま。)

と少わいかのが言いうと、

(手の着かないのは無いようね。)

と緑の露の映る手で、ずツと私の前へ直しました。酒なんですね。

(手が着いたって、姉ねえさん、食べかけではないわ、お酒ですもの。)

綺麗な齒をちらりと見せたもんですね。その時、」

二十九

「貴婦人も莞爾にっこりして、

(ま、そうね、私はちつとも頂かないものだから。)

(あら人聞きが悪いわ。私ばかりお酒を飲むよ。)

(だってそれに違いないんですもの、ほんとに困った人なこと。)

ちよいと躡めるような目をした。二人で仲よく争いながら、硝子盃を取って指しました。

(さあ、お一つ召上れな、お綾さんの食べかけではないそうですから……しかしお甘いんで不可ませんか。)

と貴婦人が言った時は、もう少い方が壇を持って待つてるんでしよう。手首へ掛けて蒼い酒に、颯と月影が射したんです。

毒虫を絞った汁にもせよ、人生れて男にして、これは辞すべきでない。

引掛けて受けました。

薫と酔が、ほんのりと五臓六腑へ染渡る。ところで大胆にその盃を、少い女に返しますとね、半分ばかり貴婦人に注いでもらつて、袖を膝に載せながら、少し横向きになつて、カチリと皓齒の音がした、目を瞑つて飲んだんです。

(姉さんは。)

(いいえ、沢山、私は卑いようなけれども、どうも大変にお肚が空いたよ。)

とお肴兼帯——怪しげな膳よりは、と云つて紫の風呂敷を開いた上へ、蒔絵の蓋を隙かしてあつた。そのお持たせの鮎の鮨を、銀の振出しの箸で取つて撮んだでしょう。

（お茶を注して来ませうね。）

と吸子を取つて、沓脱を、向うむきに片襖を蹴落しながら、美しい眉を開いて、

（二人で置くは心配ね。）

と斜めになつて袖を噛むと、鬢の戦ぎに連立つて、袂の尖がすつと折れる。

貴婦人が畳に手を支き、

（お盃をしたのは貴女でしょう。）

（ですから、なおの事。）

と言ひ棄てて袂を啣えたまま蓮葉に出ました。

私は となつた。

が、ここだ、と一番、三三盃の酔の元気で、拝借の、その、女の浴衣の、袖を二三度、

両方へ引張り引張り、ぐつと膝を突向けて、

（夫人。）と遣つた——

（生命に別条はありませんでしょうな。）

卑劣なことを、この場合、あたかも大言壮語のごとく浴あびせたんです。

笑うか、打ぶつか、呆れるか、と思うと、案外、正面から私を視みて、

(ええ、その御心配のござんせんように、工夫をしていますんです。)

と判きつぱり然言う。その威儀が正しくって、月に背けた顔が蒼あおく、なぜか目の色が光るよう
で、羅うすものしまの縞しまもきりりと堅く引ひきしま緊しまって、くつきり黒くなつたのに、悚然ぞつとすると、身震みふるいが
して酔よが醒さめた。

(ええ!)

しばらくして、私は両手を支つかないばかりに、

(申訳がありません。)

でもって恐入おそつたは、この人こそ、坂口で手を掉ふって、戻れ、と留めてくれたそれでし
よう。

(どうぞ、無事に帰宅の出来ますように、御心配を願います、どうぞ。)

と方かたなしに頭つむりを下くだげた。

(さあ。)

と大事に居直いって、

（それですから、心配をしますんですよ。今の、あのお盃を固めの御祝儀に遊ばして、もうどこへもいらつしやらないで、お綾さんと一所に、ここにお住い下さるなら、ちつともお障りはありませんけれど、それは、貴下あなたお厭いやでしょう。）

私は目ばかり働いた。

（ですが、あの通り美しいのに、貴下あなたにお願ねがいがあると云つて、衣物きものも着換えてお給仕に出ました心は、しおらしいではありませんか。私が貴下あなたならもう、一も二もないけれど……山の中は不可いませんか、お可い厭いやらしいのねえ。）

と歎息をされたのには、私もと胸むねを吐つきました。……」

三十

「ちよいと二人とも言ことばが途絶たつえた。

（ですがね、貴下あなた、無理にも発程たつてお帰り遊ばそうとするのは——それはお考えものなんですよ。……ああ、綾さんが見えました。）

と居座いずまいを開いて、庭を見ながら、

(よく、お考えなさいまし、私どもも、何とか心配をいたします。)

話は切れたんです、少い人が、いそいそ入って来ましたから。……

ところで、俯向うつむいていた顔を上げて、それとなく二人を見較べると、私には敵かたきらしい少い人の方が、優しく花やかで、口を利かれても、とりりとなる。味方らしい年上の方が、対向さしむかいになると、凄すごいようで、おのずから五体が緊しまる、が、ここが、ものの甘さと苦さで、甘い方が毒は順当。

まあ、それまでですが、私の身に附いて心配をしますと云ったのに、私わたくしども二人して、と確たしかに言つた。

すると、……二人とも味方なのか、それとも敵かたきなのか、どれが鬼で、いずれが菩薩ぼさつか、ちつとも分りません。

分らずじまいに、三人で鮓すしを食べた。茶話に山吹も出れば、巴ともえも出る、俱利伽羅の宮の石段の数から、その境内の五色ごしきの礫こいし、Ⅱ月かなしⅡⅡという芭蕉ばしやうの碑などで持切つて、二人の身の上に就いては何も言わず、またこつちから聞く場合でもなかつたから、それなりにしましたが、ただふと気に留とまつた事があります。

少い女わかが持出した、金時きんとき絵の大形の見事な食籠じきろう……形がたの菓子器ですがね。中には加

賀の名物と言う、紅白の墨形すみがたの落雁らくがんが入れてありました。ところで、蓋ふたから身をかけた、一面に蒔まいた秋草が実に見事で、塗ぬりも時代も分らない私だけでも、精巧さはそれだけでも見惚みとれるばかりだったのに、もう落雁の数が少なく、三人が一ツずつで空からになると、その底に、何にもない漆うるしの中へ、一ツ、銀で置いた松虫がスーイと髯ひげを立てた、羽のひだも風を誘つて、今にもりりんんと鳴出しそうで、余り佳いいから、あつ、と賞ほめると、貴婦人が、ついした風で、

(これは、お綾さんのお父とつさんが。この重箱の蒔絵もやつぱり、)

と言いかける、と、目配せをした目が衝つと動いた。少わかいのはまた颯さつと瞼まぶたを染めたんです。で、悪い、と知つたから、それつきり、私も何にも言いはしなかった。けれどもどうやらお綾さんが人間らしくなつて来たので、いささか心を安やすんじたは可いいが——寝るとなると、櫛うめきの寢息に、追続いた今の呻吟……

お先達、ここなんです。

二人で心配をしてやろうと言つたは、今だ。疾はやくその遁にげ口ぐちから母屋に抜けよう。が、あるいは三方から引包ひつんで、誘おびき出す一方口の土間は、さながら窠おとしあな穴あなとも思つたけ

れども、ままよ、あの二人にならどうともされる！で、浅茅生へドンと下りた、勿論跣足で。

峰も谷も、物凄ものすげい真夜中ですから、傍目わきめも触ふらないで土間へすべ入り込む。

ずつと遥はるかな、門かどへ近い処に、一間、煤すすけた障子に灯あかりが射さす。

ねや
閨ねやは……あすこだ。

難ありがた有たい、としつとり、びしよ濡れに夜露の染しんだ土間を、ぴたぴたと踏んで、もつと

も向うの灯は届かぬ、手探りですよ。

やがて、その土間の広くなつた処へ掛かかると、朧おぼろげ氣に、縁と障子が、こう、幻のように

見えたも道理、外は七月十四日の夜よの月。で、雨戸が外れたままです。

けれども峰を横倒しに戸口に挿込んだように、靄もやの蔓はびこつたのが、頭かしらを出して、四辺あたりは一

面に濛もうもつ々として、霧の海を鴉からすが縫うように、処々、松杉こすえの梢こずえがぬつと顛あらかれた。他ほかは、幅

も底も測はかりし知られぬ、山の中を、時々すつと火の筋が閃ひらめいて通る……角に松明たいまつを括くくつた

牛かと思う、稲妻ではない、甲かぶとむし虫が月を浴びて飛ぶのか、土地神とちのかみが蠟燭ろうそく点けて歩あ

行くらしい。

見ても凄すげい、早やそこへ、と思つて寝衣ねまきの襟かきを搔あわ合あせると、その目当ねやの閨ねやで、——確たしかに

女の——すすり泣きする声がありました。……ひそひそと泣いているんですね。」

三十一

「夜半に及んで、婦人の閨へ推参で、同じ憚るにしても、黙って寝ていれば呼べもするし、わらいこえ笑 声 くみなら与し易いが、泣いてる処じや、たとい何でも、迂濶うかつに声も懸けられますまい。何しろ、泣 なきかなし悲むというは、一通りの事ではない。気にもなるし、案じられもする……

……また怪しくもあつた。ですから、悪いが、密そつと寄つて、そこで障子の破やぶれめ目から——その破目が大層で、此方てまえへ閉つてます引手の処なんざ、棧さかがぶら下つて行抜きの風穴かざあなで。二小間ふたこま青蒼まっさおに蚊帳すそが漏れて、裾すその紅麻こうあざまで下へ透いてて、立つと胸まで出そうだから、覗のぞくどころじやありません。

かが屈んで通抜けました。そこを除よけて、わざわざ廻つて、逆に小さな破やぶれから透かして見ると……

蚊帳ごし越こですが、向うの壁くつつに附着あかりけた燈と、対向さしむかいでよく分る。

その灯ひを背にして、こちら向きに起返つていたのは、年上の貴婦人もえぎで。蚊帳もえぎの萌黄に色

が淡く、有るか無いか分らぬ、長襦袢ながじゆばんの寝衣ねまきで居た。枕は袖の下に一個見えたが、絹ひとつの四布蒲団よのぶとんを真中まんなかへ敷いた上に、掛けるものの用意はなく、また寝るつもりもなかつたらしい——貴婦人の膝に突伏つつぶして、こうぐつと腕かひなづかを掴つかまつて、しがみついたという体ていで、それで※々《なよなよ》と力なきように背筋を曲くつて、独鈷とっこいり入はかたの博多しんぎの扱帯まつわが、一ツ絡まつわつて、ずりりと腰すべを迂すべつた、少い女わかは、帯だけ取とつたが、明石あかしの縞しまを着たままなんです。泣ないているのはそれですね。前刻さつきから多時しばらくそうやっていたと見えて、ただしくしく泣なく。後れ毛おくが揺れるばかり。慰めていそうな貴婦人も、差俯さしうつむ向むいて、無言むげんの処ところで、仔細しさいは知れず……花室はなむろが夜風に冷えて、咲凋さきしほれたという風情。

その内に、肩越わかに抱くようにして投掛なけていた貴婦人の手で脱すくがしたか、自分の手先てのさきで払はらつたか、少い女わかの片肌かみが、ふつくりと円まるく抜ぬけると、麻あの目めが颯さつと遮さつたが、直すくに底澄そこずんだように白しろくなる……また片一方ひとへを脱ぬいだんです。脱ぬぐと羅うすものの襟えりが、肉置ししおきのほどの好い頸筋えりすじに掛かつて、すつと留とどまつたのを、貴婦人の手が下へ押下おげると、見る目には苛いららしゅう、引剥ひっぱぐように思おもわれて、裏うらを返かへして、はらりと落ちて、腰帯こしおびさがりに飜ひつた。

と見ると、蒼白そうはくく透とおつた、その背筋せきすじを振よつて、貴婦人の膝ひざへ伸のび上ありざまに、半月形はんげつなりの乳房ちちうをなぞえに、脇腹わきばらを反さからしながら、ぐいと上げた手を、貴婦人の頸うなじへ巻まいて、その

肩へ顔を付ける……

その半裸体の脇の下から、乳房を斜に掛けて、やア、抉った、突いた、血が流れる、炎が閃いて燃えつくかと思う、洪と迸ったような真赤な痣があるんです。」

山伏は大意ついて聞くのである。

「その痣を、貴婦人が細い指で、柔かにそろそろと撫でましたっけ。それさえ気味が悪いのに、十度ばかり擦つておいて、円鬚を何と、少い女の耳許から潜らして、あの鼻筋の通つた、愛嬌のない細面の緊つた口で、その痣を、チュツと吸う、」

「うーむ、」

と山伏は呻吟つた。

「私は生血を吸うのだと震え上つた。トどうかは知らんが、少い女の絡んだ腕は、ひとりで貴婦人の頸を解けて、ぐたりと仰向けに寝ましたがね、鳩尾の下にも一ヶ所、めらめらと炎の痣。

やがて、むつくりと起上つて、身を蹴した半身雪の、棲を乱して、手をつくど、袖が下つて、裳を捌いて、四ツ這いになった、背中にも一ツ、赤斑のある……その姿は……何とも言えぬ、女の狗。」

「ああ！」

「驚く拍子に、私が物音を立てたらしい。貴婦人が、衝と立つと、蚊帳越にパツと燈を……少い女は這つたままで搔消すよう——よく一息に、ああ消えたと思う。貴婦人の背の高かつたこと、蚊帳の天井から真白な顔が突抜けて出たようで——いまだに気味の悪さが俯立ってちらちらします。」

あとは、真暗、蚊帳は漆のようになった。」

三十二

「何が何でも、そこに立つちやいられんから、這つたか、摺つたか、弁別はない、凸凹の土間をよろよろで別亭の方へ引返すと……」

また、まあどうです。

あの、雨戸がはずれて、月明りが靄ながら射込んでいる、折曲った縁側は、横縦にがやがやと人影が映って、さながら、以前、この立場が繁昌した、午飯頃の光景ではありませんか。

入乱れて皆腰を掛けてる。

私は構わず、その前を切つて抜けようと思いました。

大胆だと思えますか——何、なあにそうではない。度胸も信仰も有るのではありません、がすべてこういう場合に処する奥の手が私にある。それは、何です、剣術の先生は足が顫えて立縮んだが、座頭の坊は琵琶を背負つたなり四這いになって木曾の棧をすらすら渡り越したという、それと一般。

希代な事には、わざと胸に手を置いて寝て可恐い夢を平気で見ます。勿論夢と知りつつ慰みに試みるんです。が、夢にもしろ、いかにも堪らなくなると、やと叫んで刎起きる、冷汗は浴るばかり、動悸は波を立てていても、ちつとも身体に別条はない。

これです！

いざとなれば刎起きよう、夢でなくつて、こんな事があるべき筈のもんじやない、と断念めは附けましたが。

突懸り、端に居た奴は、くたびれた麦藁帽を仰ぎまに被つて、頸窪へ摺り落ちそうに天井を睨んで、握拳をぬつと上げた、脚絆がけの旅商人らしい風でしたが、大欠伸をしているのか、と見ると、違つた！空を掴んで苦しんでるので、咽喉から垂

らたら
々と血が流れる。

その隣座となりざに、どたりと真俯向けまうつむになつた、百姓体ていの親仁おやじは、抜衣紋ぬきえもんの背中に、薬やげん研形がたの穴がある。

で、ウンウン呻吟うめく。

少し離れて、青い洋服を着た少年の、二十ばかりで、学生風のが、頰しきに紐ひものようなものを持つて腰の廻りを巻いてるから、帯でもするかと見ると、振ぶら下つた腸はらわたで、切裂かれ臍へその下へ、押込もうとする、だくだく流れる血の中で、一ひとつ掴つかみ、ずるりと詰めたが、ヒイツと悲鳴で仰向けあおむに土間に転がり落ちると、その下になつて、ぐしやりと圧拉ひしゃげように、膝を頭ずの上へ立てて、蠢うごめいた頤髯あごひげのある立派な紳士は、附元つけもとから引断ひききれて片足ない、まるで不具かたわの蟋きりぎりす蟀すずめ。

もう、一面に算を乱して、溝泥どぶどろを擲たたきつ附けたような血のりの中に、伸びたり、縮んだり、転がつたり、何十人だか数が分りません。――

いつの間にか、障子が透すけて、広い部屋の中も同断です。中にも目に着いたのは、一面の壁の隅に、朦朧もうろうと灰色の磔はりつけ柱ばしらが露あらわれて、アノ胸つきそを突反つきそらして、胴を橋に、両手を開いて釣つりさが下つたのは、よくある基督キリストの体ていだ。

床柱と思う正面には、広い額の真中へ、五寸釘が突刺さつて、手足も顔も真蒼に黄色い眼を赫と睜く、この俤は、話にある幽霊船の船長にそっくり。

大俎がある、白刃が光る、篋のように槍を組んで、まるで地獄の雛壇です。

どれも抱着きもせず、足へも縋らぬ。絶叫して目を覚ます……まだそれにも及ぶまい、と見い見い後退りになつて、ドンと突当つたまま、蹠跟けなりに投出されたように浅茅生へ出た。

(はああ。)

と息を引いた、掌へ、脂のごとく、しかも冷い汗が、総身を絞つて颯と来た。

例の草清水がありましよう。

日蝕の時のような、草の斑に黒い、朦とした月明りに、そこに蹲んだ男がある。大形の浴衣の諸膚脱で、毛だらけの脇を上げざまに、晩方、貴婦人がそこへ投つた、絹の手巾を引伸しながら、ぐいぐいと背中を拭いている。

これは人間らしいと、一足寄つて、

(君……)

と掠れた声を掛けると、驚いた風にぬつくりと立つたが、瓶のようで、胴中ばかり。

(首はないが交際うけえ。)

と、野太い声で怒鳴られたので、はつと思うと、私も仰向けに倒れたんです。

やがて、気のついた時は、少い人の膝枕で、貴婦人が私の胸を撫でていました。」

三十三

「お先達、そこで二人して交るがわる話しました。——峠の一軒家を買取ったのは、貴婦人なんです。

これは当時石川県のある顯官の令夫人、以前は某と云う一時富山の裁判長だった人の令嬢で、その頃この峠を越えて金沢へ出て、女学校に通っていたのが、お綾と云う、ある蒔絵師の娘と一つ学校で、姉妹のように仲が好かつたんだそうです。

相手は懺悔をしたんですが、身分を思うから名は言いませんまい。……貴婦人は十八九で、もう六七人情人がありました。多情な女で、文ばかり通わしているのや、目顔で知らせ合っただけなのなんぞ——その容色でしかも妙齡、自分でも美しいのを信じただけ、一度擦違ったものでも直ぐに我を恋うると極めていたので——胸に描いたのは幾人だか

分らなかつた。

罪の報か。男どもが、貴婦人の胸の中で掴み合いをはじめた。野郎が恐らくこのくらい気の利かない話はない。惚れた女の腹の中で、じたばたでんぐり返しを打って騒ぐ、噛み合う、掴み合う、引掻き合う。

この騒ぎが一団の仏掌藪のような悪玉になって、下腹から鳩尾へ突上げるので、うむと云つて歯を喰切つて、のけぞるといふ奇病にかかつた。

はじめの内は、一日に、一度二度ぐらいずつで留つたのが、次第に嵩じて、十回以上、手足をぶるぶると震わして、人事不省で、烈しい痙攣を起す容体だけれども、どこもちつとも痛むんじやない。——ただ夢中になつて反つちまつて、白い胸を開けて見ると、肉へ響いて、団が動いたと言います。

三度五度は訳も解らず、宿のものが回生剤だ、水だ、で介抱して、それでまた開きも着いたが、日一日数は重なる。段々開きが遅くなつて、激い時は、半時も夢中で居る。夢中で居ながら、あれ、誰が来て怨む、彼が来て責める、咽喉を緊める、指を折る、足を捻る、苦しい、と七転八倒。

情人が押懸けるんです。自分で口走るので、さては、と皆頷いた。

浅ましいの何のじやない。が、女中を二人連れて看病に駆着けて来た母親は、娘が不行ふし為だらとは考えない。男に膚はだを許さないのを、恋するものが怨むためだ、と思ったそうです。とても宿じや、手が届かんで、県の病院へ入れる事になると、医せんせい者せい達は皆頭しこうべを捻ひねった。病体少しも分らず、でただまあ応急手当に、例の仰反のげぞつた時は、薬を嗅かがせて正気づかせる外はないのです。

ざつと一月半入院したが、病勢は日に日に募つる。しかも力が強くなつて、伸しかかつて胸おきを圧える看護婦に助手なんぞ、一所に両方へ投飛ばす、まるで狂きちがい人。

そうかと思うと、食べるものも尋常だし、気さえ注つげば、間違つた口一つ利かない。天人のような令嬢わがなんで、始末に困つた。

すると、もう一人の少い方わかです。——お綾はその通りの仲だから、はじめから姉あねが病氣のように心配をして、見舞にも行ゆけば看病もしたが、暑中休暇になつたので、ほとんど病院で附切り同様。

妙な事には、この人が手を懸けると、直ぐに胸が柔かになる。開きは着かぬまでも三人四人で圧おさえ切れぬのが、静しずかに納まつて、夢中でただ譚うわごと事を云うくらいに過ぎぬ。

で、母親が、親にも頼んで、夜も詰め切つてもらつたそう。肥満ふとつちよ女の女中などは、

失礼無^{ぶしつけ}躰^た構^{かま}つちやいられん。膚^{はだぬぎ}脱^だの大汗を搔^かいて冬^{とう}瓜^がの膝^{ひざ}で乗^の上^のつても、その胸^{むね}の悪^{あく}玉^{たま}に突^つ離^{はな}されて、素^す転^{てん}ころりと倒^たれる。

(お綾様。お綾様。)

と夜^よが夜^よ中^{なか}、看^ま病^び疲^{つか}れにすやすやと寝^ねているのを起^たすと、訳^{わけ}はない、ちよいと手^てを載^のせ
て、

(おや、また来^こているよ。……)

誰^{たれ}某^{それ}だね……という工^く合^{あい}で、その時^{とき}々の男^{おとこ}の名^なを覚^{おぼ}えて、申^ま戯^ごのよう^{よう}に言^いうと、

病人^{びやうじん}が

(ああ、)

と言^いつて、胸^{むね}の落^お着^ちく処^{ところ}を、

(煩^{うるさ}い人^{ひと}だよ。お帰^{かえ}り。)

で、すつと撫^なで下^{くだ}ろす。」――

「すると、取憑とついた男どもが、眉間尺みけんじやくのように噛合かみあつたまま、出まいとして、乳ちの下を潜くぐつて転げる、其奴そいつを追つ懸くけ追つ懸くけ、お綾あやが擦さすると、腕うでへ這すべつて、舞戻みずつて、鳩尾おちをビクリと下つて、膝ひざをかけて畝うねる頃には、はじめ鞠まりほどなのが、段々小さく、豆位まめになつて、足の甲うらを蠢うごめいて、ふつと拇おやゆび指ゆびの爪つめから抜ける。その時分には、もう芥子粒けしつぶだけもないのです、お綾さんの爪つめにも堪たまらず、消滅する。

トはつと気を返して、恍惚うつつり目を開あく。夢が覚めたように、起上たつて、取乱なした態なりもそのまま、婦おんな同士、お綾の膝ひざに乗掛のりかかつて、頸くびに手を搦からみながら、切ない息の下で、
 (済まないわね。)

と言うのが、ほとんど例になつていたそうです。——お綾が、よく病人の気を知つた事は、一日あるひも痙攣あが起つて、人事不省じんじふしやうなのを介抱かいほうしていると、病人が、例に因つて、

(来たよ。)

と呻うめ吟めく。

(……でしようね、)

と親類内の従兄いとことかで、これも関係のあつた、——少年の名をお綾が云うと……

(ああ、青い幽霊、)

と夢中で言った——処へひよつこり廊下から……脱いだ帽子を手に提げて、夏服の青いので生なましろ白い顔を出したのは、その少年で。出であいがしら会頭に聞かされたので、真まっか赤になつて逃げたと言います。その癖お綾は一度も逢つた事はないのだそうで。

さあへ医師いしやは止よしても、お綾は病人から手離せませまい。

いつまで入院をしていても、ちつとも快いはいほう方に向わないから、一いったん旦内へ引取つて、静かに保養をしようという事になつた時、貴婦人の母親は、涙でお綾の親達に頼んだんです。頼まれては否いやと言わぬ、職人かたぎ気質で引受けたでしょう。

途中の、不意の用心に、男が二人、母親と、女中と、今の二人の婦人おんなで、五台、人力車を聯つらねて、俱利伽羅峠を越したのは、——ちようど十年前ぜんになる——

同じ立場たてばで、車をがらがらと引込んで休んだのは、やつぱり、今残る、あの、一軒家。しかも車から出る、と痙攣ひきつけて、大勢に抱え込まれて、お綾の膝に抱かれた処は。……

(先刻、貴下あなたが、怪あやしい姿で抱合つている処を蚊帳越に御覧なすつた、母屋の、あの座敷です。)

ツて貴婦人が言いましたつけ。

お先達。」

三造は酔えるがごとき対手あいてを呼んで、

「その時、私は更あらためて、二人の婦人にこう言いました。

（時が時、折が折なんですから、実は何にも言出しはしませんでしたが、その日、広土間の縁でばの出張りに一人腰を掛けて、力ちからもち餅もちを食べていた、烏打帽かぶを冠かぶつて、久留米かすりの紺かすりを着た学生がありました。お心は着かなかつたでしょうが、……それは私です。……

そして、その時の絵のような美しさが、可なつか懐なつかしさの余り、今度この山越やまこえを思い立つて参まつたんです。）

お先達、事実なんです。」

と三造は言いつた。

「これを聞いて少わかい女ひとが、

（そして貴下あなたが、私を御覧ごらんなさいましたのは、その時が初めてですか、）

（いいえ、）

と私が直ぐに答こたえた。

（違うかどうか分りませんが、その以前に二度あります。……一度は金沢かねざわの藪やぶの内うちと言う処——城の大手前むかと対むかい合あつた、土塀つちかきの裏うらを、鍵かぎの手形てなり。名の通りで、竹藪たけくさの中なかを石垣いしきりに

従ついて曲こうじる小路。家も何にもない処で、狐がどうの、狸がどうの、と沙汰さたをして誰も通とらない路みち、何に誘あわれたか一人で歩ある行るいた。……その時、曲まがり角かどで顔を見ました。春の真まつつびるま昼間、暖い霞のような白い路が、藪の下を一ひと条すじに貫ついた、二三間前さきを、一人通とつた娘があります。衣服きものは分わらず、何の織物か知りませんが、帯は緋色ひいろをしていたのを覚えていいる。そして結むす目びめが腰へ少し長目ながめでした。ふらふらとついて見送みおくつて行く内うちに、また曲角で、それなり分わらなくなつたんです。）

——二人は顔を見合せました。」

三十五

「私はまた……」

（もう一度は、その翌年、やつぱり春の、正午ひる少し後さがつた頃、公園の見晴しで、花の中から町中まちなかの桜を視ながめていいると、向うが山で、居る処が高台の、両方から、谷のような、一ヶ所空の寂さむしい土町ちまちと思う所の、物干ものほしの上にあがって、霞を眺めるらしい立姿の女が見えた。それがどうも同じ女らしい。ロハ台を立たつて、柳の下から乗り出して、熟じつと瞻まも

る内に、花吹雪がはらはらとして、それつきり影も見えなくなる、と物干の在所ありかも町の見当も分らなくなつてしまつた。……が、忘れられん、朧おぼろよ夜にはそこぞと思ふ小路々々を徜徉さまよい徜徉い日を重ねて、青葉に移るのが、酔のさめ際のように心寂しくつてならなかつた——人は二度とも、美しい通魔とわりまを見たんだ、と言う……私もあるいはそうかと思つた。

貴婦人が聞澄まして、

(二度目のは引越した処でしょう!)

と少い人わかに言うんです。

(物干で、花見をしたり、藪やぶの中を歩行あるいたり、やつぱり、皆みんなこういふ身体からだになる前兆でしよう。よく貴下あなた、お胸むねに留めて下さいました。姉さん、私もう一度緋色の帯がしめたいわ。)

と、はらはらと落涙して、

(お恥かしいが……)

——と続いて話した。——

で、途中介抱しながら、富山へ行つて、その裁判長さいばんちやうの家に落着く。医者では不可いかん、加か

持祈祷と、父親の方から我を折つてお札、お水、護摩となると、元々そういう容体ですから、少しずつ治まって、痙攣も一日に二三度、それも大抵時刻が極つて、途中不意に卒倒するような憂慮なし、二人で散歩などが出来るようになったそうです。

一日、巴旦杏の實の青々した二階の窓際で、涼しそうに、うとうと、一人が寝ると、一人も眠つた。貴婦人は神通川の方を裾で、お綾の方は立山の方を枕で、互違いに、つい脇枕をしたんですね。

トントントン躑音がして、二階の梯子段から顔を出した男がある。

お綾が起返ると、いつも病人が夢中で名を呼ぶ……内証では、その惚話を言う、何とか云う男なんです。

ずつと来て、裾から貴婦人の足を圧えようとするから、ええ、不躑躅な、姉を悩す、病の鬼と、床の間に、重代の黄金づくりの長船が、邪気を払うといって飾つてあつたのを、抜く手も見せず、颯と真額へ斬付ける。天窗がはつと二つに分れた、西瓜をさつくり切つたよう。

処へ、背後の窓下の屋根を踏んで、窓から顔を出した奴がある、一目見るや、膝を返しざまに見当もつけず片手なぐりに斬払つて、其奴の片腕をばさりと落した。時に、巴旦杏

の樹へ樹上りをして、足を踏張つて透見をしていたのは、青い洋服の少年です。

お綾が、つかつかと屋根へ出て、狼狽えてその少年の下りる処を、ぐいと突貫いたが、下腹で、ずりり腸が枝にかかつて、主は血みどれ、どしんと落ちた。

この光景に、驚いたか、湯殿口に立った髯面の紳士が、紹羽織の裾を煽つて、庭を切つて遁げるのに心着いて、屋根から翻然……と飛んだと言います。垣を越える、町を突切る、川を走る、やがて、山の腹へ抱つて、のそのそと這上るのを、追継りさまに、尻を下から白刃で縫上げる。

ト頂に一人立つて、こつちへ指さしをして笑つたものがある。エエ、と剣を取つて飛ばすと、胸元へ刺さつて、ぼつたり、と朽木倒。

するする攀上つて、長船のキラリとするのを死骸から抜取ると、垂々と湧く血雲を逆手に除り、山の端に腰を掛けたが、はじめて吻と一息つく。——瞰下す麓の路へ集つて、頭ばかり、うようよして八九人、得物を持つて押寄せた。

猶予わず、すらりと立つ、裳が宙に蹴出を擲んで、踵が腰に上ると同時に、ふつと他愛なく軽々と、風を泳いで下りるが早いか、裾がまだ地に着かぬ前に、提げた刃の下に、一人が帽子から左右へ裂けた。

一同が、わつと遁げる。……」

三十六

「今はもう追うにも及ばず、するすると後を歩行きながら、刃を振って、

(は、)

と声懸けると、声に応じて、一人ずつ、どたり、どたりで、算を乱した、……生木の枝の死骸ばかり。

いつの間にか、二階へ戻った。

時に、大形の浴衣の諸膚脱ぎで、投出した、白い手の貴婦人の二の腕へ、しつくり喰ついた若いもの、かねて聞いた、——これはその人の下宿へ出入りの八百屋だそうで、やっぱり情人の一人なんです。

(推参。)

か何かの片手なぐりが、見事に首をころりと落す。拳の冴に、白刃の尖が姉の腕を掠つて、カチリと鳴った。

あつと云うと、二人とも目を覚した。

お綾の手に、抜いた刀はなかつたが、貴婦人は二の腕にはめた守護袋まもりぶくろの黄色きんの金具を
 押おさえていたつていう事です。

実は、同じ夢を見たんだそうで、もつとも二階から顔を出したのも、窓のぞから覗いたのも、
 樹上りをしたのも、皆みんな同時に貴婦人は知つていた。

自分の情人を、一人々々妹が斬殺すんで、はらはらするが、手足は動かず、声も出せない。
 その疲れた身体からだで、最後に八百屋の若いものに悩まされた処——片腕一所に斬られた、
 と思つたが、守護袋で留まつたと言う。

貴婦人の病気は、それで、快癒かいゆ。

が、入交いれかわつて、お綾は今の身になつた。

と言うのは、夢中ながら、男を斬つた心持が、骨髄こつずいに徹して忘れられん。……思い出
 すと、何とも言えず、肉が動く、血汐ちしおが湧わく、筋が離れる。

他ほかの事は考えられず、何事も手に着かない、で、三度の食も欲ほしくなくなる。

ところが、親まぎが蒔絵職まきえしよく。小児こどもの時から見習いで絵心があつたので、ノオトブックへ鉛
 筆で、まず、その最初の眉間割みけんわりを描いたのがはじまりで。

顔だけでは、飽足らず、線香のような手足を描いて、で、のけぞらした形へ、疵をつけ
る。それも墨だけでは心ゆかず、やがて絵の具をつかい出した。

けれども、男の膚は知らない処女の、艶書を書くより恥かしくって、人目を避くる苦勞
に瘦せたが、病は嵩じて、夜も昼もぼんやりして来た。

貴婦人も、それつきり学校はやめたが、お綾も同断。その代り寂い途中、立向うても見
送つても、その男を目に留めて、これを絵姿にして、斬る、突く、胸を刺す。……血を彩
つて、日を経ると、きつとそのものは生命がないというのが知れる……段々嵩じて、行違
いなりにも、ハツと気合を入れると、即座に打倒れる人さえ出来た。

が、可恐いのは、一夜、夜中に、ある男を呪詛していると、ばたりと落ちて、脇腹か
ら、鳩尾の下、背中と、浴衣越しに、——それから男に血を彩ろうという——紅の絵の
具皿の覆れかかったのが、我が身の皮を染め、肉を透して、血に交つて、洗つても、拭つ
ても、濃くなるばかりで、褪せさせぬ。

お綾は貴婦人の膝に縋つて、すべてを打明けて泣いたんです。

その頃は、もう生れかわつたようになって、何某の令夫人だった貴婦人は、我が身も
同じに、悲み傷んで、何は措いても、その悪い癖を撓め直そうと、千辛万苦したけれど

も、お綾は、怪い情を制し得ない。

情を知った貴婦人は、それから心着いて試みると、お綾に呪詛のろわれたものは、必ず無事ではないのが確たしかで。

今はこう、とお綾の決心を聞いた上、心一つで計らって、姫捨山を見立てました。

ところが、この俱利伽羅峠は、夢に山の端はに白刃しらばを拭ぬぐって憩ぬぐった、まさしくその山の姿だと言う。しかしこの峠を越したのが、少い人わかには、はじめて国の境を出たので、その思出もあつたからでしょう。

ちようど、立場たてばが荒廢すたれて、一軒家が焼残すたつたというのも奇蹟だからと、そこで貴婦人が買取かひつて、少い女わかひとの世を避ける隠れ里にしたのだと言います。

で、一切すべての事は、秘密に貴婦人が取とりまかなう。」

三十七

「月に一度、あるいは二度、貴婦人が忍んで山に上つて来る。その時は、ああして抱いて、もとは自分から起つた事と、膚はだの曇くもりに接吻キッスをする。

が、雪なす膚に、燃え立つ鬼百合の花は、吸消されもせず、しほみもしない。のみならず、会心の男が出来て、これはと思うその胸へ、グザと刃やいばを描いて刺す時、膚を当てると、鮮紅からくれないの露を絞つて、生血いきちの雫しずくが滴点したたると言います。

広間の壁には、竹篋たけべらで土を削つて、基督キリストの像が、等身に刻みつけて描かいてあつた。本箱の中も、残らず惨憺さんたんたる彩色画さいしきがで、これは目当の男のない時、歴史に血を流した人を描くのでした。」

と物語る、三造の声は震えた。……

「お先達。

で、貴婦人は、

(縁のある貴下あなた。……ここに居て、打ちもし、蹴りもし、縛くりもして、悪い癖を治して上げて下さい。)

と言う。

若い人は、

(おなつかしい方だけに、こんな魔所には留められません、身体からだの斑ふちが消えないでは。)

と、しつかり袂たもとにすが縋すがつて泣きます。

私は、死ぬ決心をするほど迷った。

果しなく猶予ためらっているのを見て、大方、それまでに話した様子で、後で呪詛のろわれるのを恐れるために、立て得ないんだと思つたらしい。

沓脱くつぬぎをつかつかと、真白い跣足はだしで背戸へ出ると、母屋の羽目はめを、軒へ掛けて、森のように搦からんだ烏からすうり 瓜つるの蔓たぐを手繰ひつて、一束ひとつかねずると引きながら、浅茅生あさちうの露つるに膝ひざを埋うずめて、背せなから袖そでをぐるぐると、我手わがてで巻くので、花は雪のように降りかかった。

旭あさひが出ました。

驚く私を屹きつと見て

(誓ちかいたがは違えぬ！ 貴下きげが去いつて、他ほかの犠牲にえの——巢うづにかかるまで、このままここで動きはしない、)

心安く下山せよ。

(さあ、)

と言うと、一目凝じつと見た目を瞑ねむつて、黒髪をさげて俯向うつむいたんです。

顔を背けて、我にもあらず、縁えりに腰を落した内に、貴婦人きふじんが草鞋わらじを結むすんだ。

堪たまらなくなつて、飛出して、蔓つるを解とこうと手を懸ける。胸むねを引いて頭かぶを掉ふるから、葉を

引^{ひき}撈^{むし}つて、私は涙を落しました。

(私なんぞ構わんから。)

(いいえ、こうしてまで誓を立てぬと、私は貴下を殺すことを、自分でも制し切れない。
一夜冥土へ留めました。お生きなさいまし、新にお存^{あらた}らえ遊ばせ。)

と、目を潤^{うる}ましたが凜^{りり}々しく云う。

(たとい、しばらくの辛抱でも。男を呪^{のろ}う気のないのは、お綾さんにも幸^{しあ}福^{わせ}です。そうしておおきなさいまし。)

と、貴婦人が、金剛杖も一所に渡した。

膝さがりに荷を下げて、杖を抱いてしよんぼり立つのを……

(さようなら、御機嫌よう。)

(はっ、)

と言つて土間へ出たが、振返ると、若い女は泣いていました。露^{きら}が閃^{きら}めく葉を分けて、
明石に透いた素膚^{すはだ}を焼くか、と鬼百合が赫^{かつ}と紅^{あか}い。

その時、峰はずれに、火の矢のように、颯^{さつ}と太陽の光が射^さした。貴婦人が袖^{かぎ}を翳^{かぎ}して、
若い女を庇^{かば}いました。……

あの、鬼の面は、昨夜、貴下を罵るトタンに、婦を驚かすまいと思つて、夢中で投げたが——驚いたんです、猿ヶ馬場を出はざる峠の下り口。谷へ出た松の枝に、まるで、一軒家の背戸のその二人を睨むよう、濶と眼を睨いて、紫の緒で、真面に引掛つていたのです。……

お先達、私はどうしたら可いでしょう。」

と溜息を一度に吐く——

「ふう、」

と一時に返事をして、ややあつて、

「鬼神に横道はござらんな。」

と山伏も目を瞬いた。

で、そのまま誓を立てさせては、今時誰も通らぬ山路、半日はよし、一日はよし、三日と経たぬに、飢もしよう、渴きもしよう、炎天に曝されよう。が、旅人があつて、幸に通るとすると、それは直ちに犠牲になる。自分はよくても、身代りを人にさせる道でない。

心を山伏に語ると、先達も拳を握つて、不束ながら身命に賭けて諸共にその美女を説いて、悪き心を翻えさせよう。いざうれ、と清水を浴びる。境も嗽手水して、明

王の前に額ぬかづ着いて、やがて、相並んで、日を正射まともに、白い、眩まばゆい、峠を望んで進んだ。

雲から吐出されたもののように、坂に突伏つつぶした旅人りよじんが一人。

ああ、犠牲にえは代った。

扶たすけ起こすと、心なき旅人たびびとかな。朝がけに禁制の峠を越したのであつた。峠では何事も

なかつたが、坂で、躓つまずいて転んだはずみに、あれと喚わめく。膝から股またへ真ま白しろな通草あけびのよう、

さくり切れたは、俗に鎌かまいたち 颯かが抓かけたと言う。間々ある事とか。

先達さきだちが担ひいで引返ひっかえした。

石動の町の医師を託こしとづかりながら、三造は、見返りがちに、今は蔓草つるくさの絆きずなも断たつたろう

……その美女たおやめの、山の麓ふもとを辿たどつたのである。

明治四十一年（一九〇八）年十一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成5」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十一卷」岩波書店

1941（昭和16）年8月15日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年7月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星女郎

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>